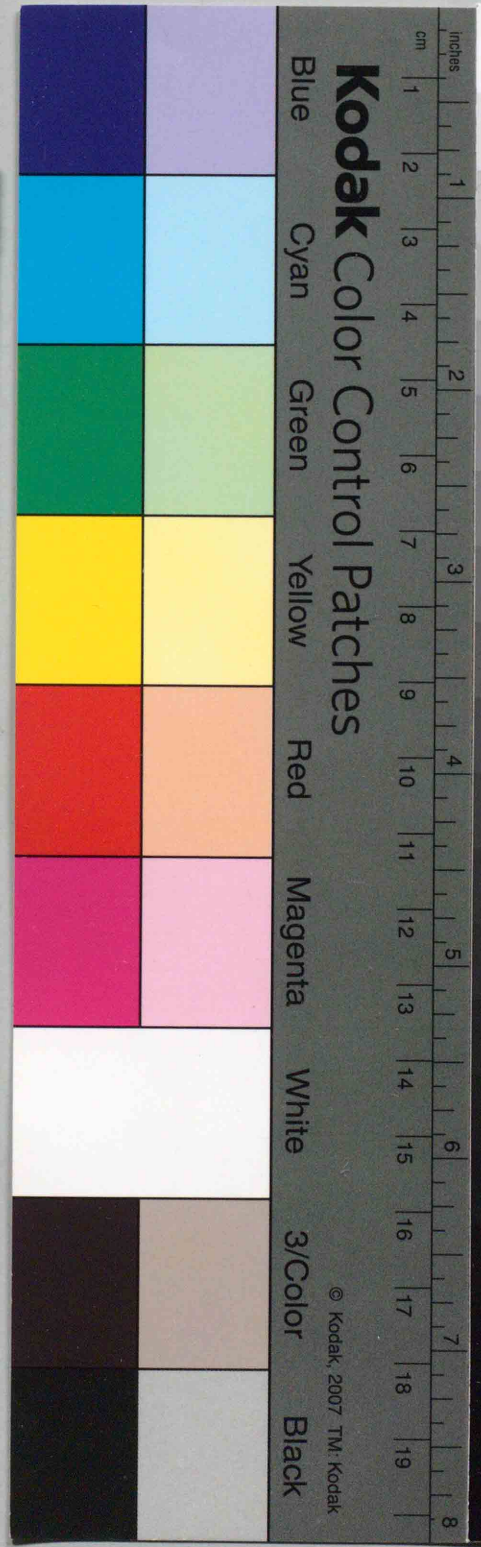


初等科國語

七

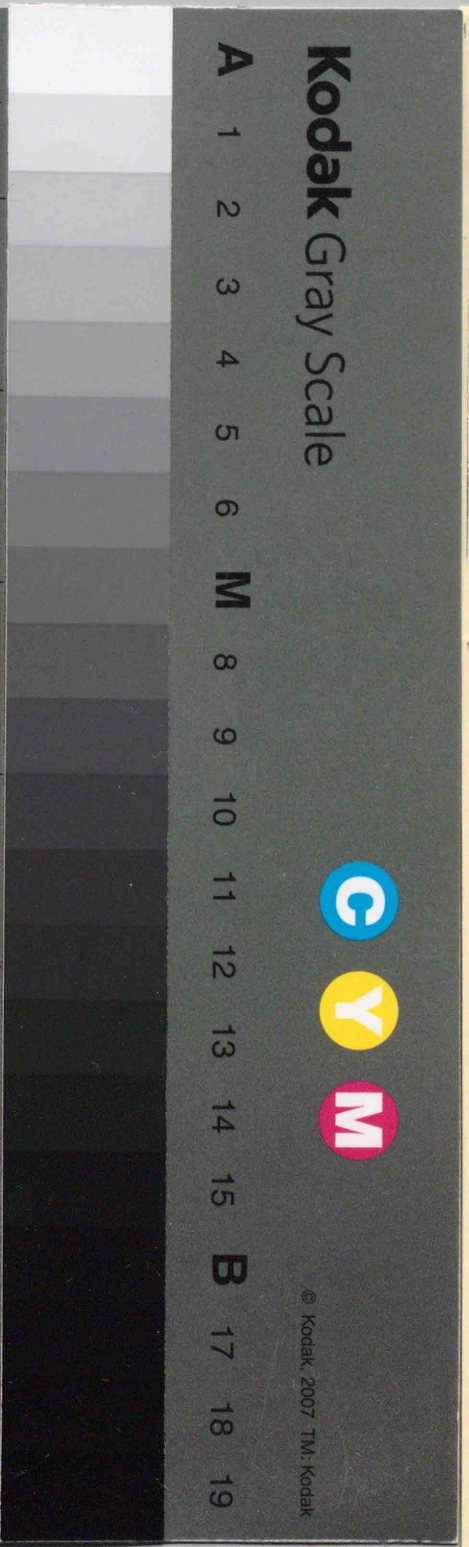
文部省



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

43156
教科書文庫
4
8/0
33-1942
25000
32335





初等科國語

七

文
部
省

登錄番号	32335
分	375.9
類	M

目録

一	黒龍江の解氷	四
二	永久王	七
三	御旗の影	十六
四	敬語の使ひ方	二十五
五	見わたせば	三十二
六	源氏物語	三十四
七	姉	四十六
八	日本海海戦	五十一
九	鎮西八郎爲朝	五十八
十	晴れ間	六十七
十一	雲のさまざま	七十

十二	山の朝	七十七
十三	燕岳に登る	八十二
十四	北千島の漁場	九十七
十五	われは海の子	百二
十六	月光の曲	百五
十七	いけ花	百十四
十八	ゆかしい心	百二十
十九	朝顔に	百二十五
二十	古事記	百二十六
二十一	御民われ	百三十二

附録

一	ジャワ風景	二	ビスマルク諸島
三	セレベスのゐなか	四	サラワクの印象

一 黒龍江こくりゅうの解氷

五尺もある厚い氷、

遠い兩岸の間をぎつしりと張りつめてゐた氷、

その下で眠つてゐた黒龍江が、

ひとつ大きなあくびをしてから、

春のいぶきをいつぱいに吸ひ込んだ。

めりめりと氷が割れる、

碎ける、

地響きをたてながら。

半年も地面のやうに動かなかつた川が、

今、動きだした。

あちら、こちらに川波が光りだした。

ああ、自然の大きな脈搏みやくはく。

松花江をのみ、

ウスリー江をのみ、

はるかオホーツクの海へ向かつて、

「はあ」と冬のなごりを吐く。

暗黒色の流れにあふられ、
 氷塊と氷塊がつきあたり、
 噛みあひのしかかり、
 でんぐりかへり、
 群がつて流れる。

やがて黒龍江はやさしい手をひろげ、
 わが子のやうに満洲をだきかかへて、
 春の歌を歌ふ。

二 永^{なが}久^{ひさ}王

一



陸軍幼年學校の制服をお召し
 になつた北白川宮永久王は、母宮
 殿下の御前にお立ちになつた。

「ただ今、北海道から歸つてまゐ
 りました。これは、おみやげに

と思ひまして、求めてまゐつた黒竹の杖でございます。」
 王は、お持ち歸りになつた杖を、母宮殿下におあげになつた。

それをお受け取りになつた母宮殿下は、

「この杖をかうして持つてゐると、永久に手を引かれてゐるやうです。」

と仰せられ、やさしく王を御覽になつて、につこりお笑ひになつた。

二

晴れた夏の空が、武藏野むさしののの上におほひかぶさつてゐる。

陸軍士官學校豫科を御卒業になつた王は、士官候補生として、今日も武藏野を縦横にかけめぐりながら、演習をなさつてゐた。

今まで晴れてゐた空が急に暗くなつて、大粒の雨が降りだした。

演習が終つて、王は、一軒の農家の軒先にお立ちになつた。御軍帽のひさしからは、雨のしづくがしたたり落ち、御軍服は、しぼるやうにぬれてゐた。

「雨で、殿下には、さぞお困りになつたことでありませう。」と、中隊長が申しあげると、王は、

「二月餘りも雨が降らなかつたから、この雨で、農家はさぞ喜ぶことでせう。ほんたうによい雨です。」

とおつしやつて、水晶すゐしやうのすだれを掛けたやうに降りしきる

雨を、いかにも氣持よきさうにお眺めになつた。

三

昭和十五年の春。

陸軍砲兵大尉の御軍装で、王は、母宮殿下の御前に不動の姿勢でお立ちになつた。母宮殿下は静かにおつしやつた。

「永久のからだは、お上におささげ申したものですから、決死の覺悟で、御奉公なさるやうに。」

大命を拜されて、王は蒙疆もうきやうの地へ御出征になる。その最後のお別れに、母宮殿下に御挨拶ごあいさつを申していらつしやるのであつた。

「陛下のおんため、力の續くかぎり戦ひぬく覺悟でございませ。どうぞ御安心くださいませ。」

王は、母宮殿下にじつと御注目になり、敬禮をあそばされた。母宮殿下も、御満足さうに王の顔を御覽になり、心もち御頭をおさげになつて、御答禮をあそばされた。

四

廣々とした蒙疆の原野、第一線における王の御宿舍は、粗末な蒙古の住民の家である。

軍務のおつかれで、王は、ある夜しばしかり寢のゆめをお結びになつてゐたが、あたりのさわがしさで、目をおさまし

になつた。

「お目ざめでございますか。せつかくの御熟睡をおさま
たげいたしましたして、申しわけもございません。」

おつきの者が、恐る恐る申しあげると、

「何か起つたのか。」

とやさしくお問ひになつた。

「いや、ほかでもございません。この附近の住民が病氣で、
今にも死にさうだと申してゐるのでございます。」

「病氣。それは氣のどくだ。」

王は、かうおつしやつて、一服の薬をお取り出しになつた。

「これを飲ませておやり。」

とおつきの者にそれをお渡しになつた。

翌朝、王の御宿舍の前には、蒙古の住民たちが並んでゐた。
王のお情に、心からお禮を申しあげるためであつた。

五

「十時二十分、戦闘たけなはなる時、官機を迎ふるの光榮に
浴す。將兵一同感激にたへず。」

第一線から飛行機でお歸りになつた王は、武官のさし出す
この電報を御一讀ののち、今飛んでおいでになつたはるか
かなたの空を、もう一度ふり返つて御覽になつた。

砲煙彈雨の間、王は、彼我の戦況を御偵察ていさつになつて、作戦の御指導をなさつたのである。第一線の將兵たちは、この電文が示すやうに、ひたすら光榮に感激して、勇氣百倍したのであつた。

六

昭和十五年九月六日、防空演習で帝都は夜のやみにとぎされてゐた。その中を、王の御なきがらを奉安する御ひつぎの車は、儀仗隊ぎちやうの護りもいかめしく、立川飛行場から、靜かに高輪たかなわの御殿へお進みになつてゐた。

午後八時ごろ、御ひつぎの車は、御殿にお着きになつた。

正門の前には、お四つでいらつしやる若宮道久王殿下が、喪章しやうをつけない日の丸の小旗をお持ちになつて、父宮の御凱旋せんをお迎へあそばされてゐた。

「名譽の御凱旋をなさるのですから、心の中で萬歳を唱へてお迎へするのです。」

とおつしやつた祖母宮殿下のおいひつけ通りになさつたのであらう。

御ひつぎは、表玄關げんくわんから、母宮殿下の御居間、櫻の間にまづおはいりになつた。

王が幼年學校の生徒でいらつしやつた時、北海道からお

歸りになつて御挨拶をなされたのも、蒙疆へ御出征の時、最後の御對面をなされたのも、この同じ櫻の間であつた。

その御居間で、神におなりになつた王に、母宮殿下は、母君としての御慈愛に満ちたお迎へのおことばを、親しくおかはしになつたのであつた。

三 御旗の影

笠置^{かさぎ}の城

そもそも笠置の城と申すは、山高くして一片の白雲峯を埋め、谷深くして萬丈の青岩道をさへぎる。つづら折りなる道をあがること十八町、岩を切つて堀とし、石をたたんで堀とせり。たとへ防ぎ戦ふ者なくとも、たやすくのぼるべきやうなし。

されども城中鳴りを静めて、人ありとも見えざりければ、官軍はや落ちたりと思ひて、賊の寄せ手七萬五千餘騎、堀がけともいはず、かつらに、取りつき岩の上を傳ひて、一の木戸口の邊まで寄せたりけり。

ここに一息休めて、城の中をきつと見あぐれば、錦の御旗に日月を金銀にて打つて着けたるが、天日にかがやき渡り、そのかげに甲武者三千餘人、かぶどの星をかがやかし、甲

の袖を連ねて、雲霞のごとく並びあたり。そのほか、やぐらの上、矢ぎまのかけには、射手とおぼしき者ども、弓のつるをくひしめし、矢束ね解いて待ちかけたり。その勢決然として、あへて攻むべきやうもなし。寄せ手これを見て、進まんとするもかなはず、引かんとするもかなはずして、心ならずも支へたり。

しばらくありて、木戸の上なるやぐらより、名のりけるは、「三河の國の住人、足助の次郎重範、かたじけなくも一天の君に命をささげまゐらせて、この城の一の木戸を堅めたり。前陣に進みたる旗は、美濃尾張の勢と見るはひが目か。萬乗の君のおはします城なれば、六波羅殿や御向かひあらんと心得て、大和鍛冶のきたへ打つたる矢じりを少々用意仕りて候。一筋受けて御覽じ候へ。」

といふままに、三人張りの弓に十三束三伏せの矢をつがへ、満月のごとく引きしぼりし、しばし堅めてちようと放つ。

その矢は、はるかなる谷をへだてて二町餘りのかなたに控へたる荒尾の九郎が甲を通して、右の脇腹までぐざと射込む。一矢なれども必殺のねらひなれば、荒尾馬より逆さまに落ちて、起きも直らず死しけり。

弟の彌五郎、これを敵に見せじと、矢面に立ちふさがりて

いひけるは、

「足助殿の御弓勢、日ごろ承り候ひしほどはなかりけり。

ここを遊ばし候へ。御矢一筋受けて、甲をためし候はん。」と、胸をたたいて立ちたりけり。

足助これを聞きて、「この者、甲の下に腹巻を重ねて着たればこそ、前の矢を見ながら、ここを射よと胸をたたくらん。もし甲の上を射ば、矢じり碎け折れて、通らぬこともあらん。かぶとの真向を射たらんに、なとか通らざるべき。」と思案して、

「さらば一矢仕り候はん。受けて御覽じ候へ。」

といふままに、十三束三伏せ、前よりもなほ引きしぼりて、手答へ高くはたと射る。思ふねらひを違へず、彌五郎がかぶとの真向碎きて、眉間みけんの真中をぐざと射込みたりければ、二言ともいはず、兄弟同じ枕に倒れ重なつて死にけり。

これを軍の初めとして、大手からめ手、城の内をめき叫んで攻め戦ふ。矢叫びの音、ときの聲、しばし止む時なかりけり。

寄せ手いよいよ重なつて、木戸口の邊まで攻め來たる。

ここに本性房ほんじやうぼうといふ大力の僧衣の袖を結んで引き違へ、百人にても動かしがたき大石を、かるがると脇にさしはさみ、

まりのごとく二三十、續け打ちにぞ投げつくる。數萬の寄せ手、どうと打ちすゑられ、なだれを打つて人馬落ち重なる。さしにも深き谷々、死人にて埋まりけり。

これよりのちは、寄せ手雲霞のごとしといへども、城を攻めんといふ者なく、ただ四方を圍みて、遠攻めにこそしたりけれ。

稲村が崎さき

明け行く月に敵の方を見渡せば、北は山高く道けはしく、數萬のつはもの陣を並べて控へたり。南は稲村が崎にて砂上道せまきに、波打際まで逆さか茂木を仕掛け、沖四五町がほどに大船どもを並べて、横矢を射んとかまへたり。されば、この堅陣を打ち破つて攻め寄せんこと、たやすかるべしとは見えざりけり。

義貞よしさだ馬よりおり、かぶとを脱いで海上をはるばると伏し拜み、祈りけるやう、

「義貞今臣たるの道を盡くさんため、武具を取つて敵陣にのぞむ。その志ひとへに皇化をたすけ奉つて、民生を安んぜんとするにあり。仰ぎ願はくは、臣が心をあはれみたまへ。」

と、しばし祈念をこらしつつ、みづからはける黄金作りの太

刀を抜きて、海中へ投げ入れたり。

その夜の月の入り方に、稲村が崎にはかに二十餘町干あがりて、平砂はるかに連なり、横矢を射んとかまへたる數千の兵船も、引き潮にさそはれて、遠く沖の方にただよへり。ふしぎといふも類なし。

義貞これを見て、

「神も納受したまふぞ。進めや、つはものども。」

と下知しければ、江田^{えだ}・大館^{おほだち}・里見^{さとみ}・鳥山^{とりやま}・田中^{たなか}・羽川^{はねがは}・山名^{やまの}・桃井^{もものゐ}の面を始めとして、越後^{えちご}・上野^{かうづけ}・武藏^{むさし}・相模^{さがみ}の軍勢六萬餘騎、稲村が崎の遠干がたを、眞一文字にかけ通りて、鎌倉^{かまくら}へ亂れ入る。

四 敬語の使い方

文化の進んだ國、教養の高い國民にあつては、禮儀を重んじ、ことばづかひをていねいにするのが、非常に大切なことになつてゐる。特に、わが國語には敬語といふものがある。つて、その使い方が特別に發達してゐるから、ことばづかひをていねいにするためには、ぜひとも敬語の使い方をよく心得ておかなければならない。

まづ相手の人に對して尊敬の意を表すために、特別なことばを、われわれは常に用ひてゐることに氣づくであらう。

相手を「あなた」といふのが、すでに敬語である。また、相手や目上の人、の動作を述べるのに、「いらつしやる」とか、「めしあがる」とか、いふのも、それである。

相手を尊敬するためには、自分のことを謙遜して、いふのがわが國語のいき方で、これも敬語のうちにはいる。自分のことを「わたくし」といふのが、すでに謙遜したことばであり、「行く」「食ふ」「する」も「まゐる」「いただく」「いたす」など、いふのが普通である。

私もまゐりませう。

もう十分にいただきました。

それ故、自分のことや目下のもの、のことを

私は、まだめしあがりません。

妹たちも、きのふの祝賀式にいらつしやいました。

など、いつては、もの笑ひである。

しかし、自分の動作であつても、それが相手のためにする場合は、

私が御案内申しませう。

御心配申しあげました。

では、一通りお話いたします。

のやうに、「御やお」をつけて敬語にするのである。相手のす

ることに「御やお」をつけて敬ふのはいふまでもない。

決して御心配くださいますな。

お志、ありがたう存じます。

父・母・兄・姉をぢをば等は、目上の人であるから、それを相手とする時、

おとうさん、どこへおいでになりますか。

をばさんは、どうなさいます。

と敬つていふのである。しかし、一たび他人の前へ出た場合には、自分のことを謙遜していふのと同じく、自分の身内の者のこともまた謙遜していふのである。だから、

おとうさんがよろしくおつしやいました。

おかあさんは、今日おいでになりません。

私のをぢさんは、大阪にをられます。

ねえさんは、お仕事をしておいでです。

といふよりは、

父がよろしく申しました。

母は、今日ありません。

私のをぢは、大阪にをります。

姉は、仕事をしてあります。

といふのが、相手に對して禮儀のあるいひ方である。ただ

自分の身内でない目上の人のこととなると、他人の前でもやはり敬つていなければならぬ。

いづばんに、女は男よりもいつそうていねいにものをいふのが、わが國語のならばしである。したがつて、女の使ふ敬語には、やや特殊のものがある。多くは家庭で用ひる物品などに對して、「おなべ」「おさかな」「お召物」とかあるひは、「汁を」「おみおつけ」などいふのがその例である。「行く」「来る」を「いらつしやる」といふなども、女らしいことばである。今日では、男も混用したり、あるものはいづばんに使用されたりするが、それが度を越すと、かへつてばかていねいになつたり、また柔弱に聞えたりする。それに、何でも「御」や「お」をつけさへすれば敬語になると思つたり、敬語を使ひさへすれば禮儀になると考へたりするのは、大きなあやまりである。敬語の使用は、禮儀にかなふとともに、常に適正であることと、眞の敬意すなはち敬ふ眞心がことばに現れることが、最も大切である。

敬語の使ひ方によつて、尊敬や謙遜の心をこまやかに表すことのできるのは、實にわが國語の一大特色であり、世界各国の言語にその例を見ないところである。古來わが國民は、皇室を中心とし、至誠の心を表すためには、最上の敬語

を用ひることをならはしとしてある。さうして、また長上を敬ふ家族制度の美風からも、ていねいなことばづかひが重んじられてゐる。わが國語に、敬語がこれほどに發達したのは、つまりわが國がらの尊さ、昔ながらの美風が、ことばの上に反映したのにはかならないのである。

五 見わたせば

索性法師

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける

紀貫之

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

よみ人しらす

白雲にはね打ちかはし飛ぶかりの數さへ見ゆる秋の夜の月

能因法師

山里の春の夕ぐれ来て見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける

西さい行ぎやう法師

道のべに清水しみづ流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ

藤原あき顯すけ輔

秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいづる月のかげのさやけさ

六 源氏物語

紫式部は、子どもの時から非常にりこうでした。兄が史記を讀んでゐるのを、そばでじつと聞いてゐて、兄より先に覺えてしまふほどでした。父の爲ため時は、

「ああ、この子が男であつたら、りつばな學者になるであらうに。」

といつて歎息しました。

大きくなつて、藤原宣孝のぶたかの妻となりましたが、不幸にも早く夫に死に別れました。そのころから紫式部は、筆をとつて有名な源氏物語を書き始めました。

そののち上東門院に仕へて、紫式部の名は一世に高くな

りました。式部は文學の天才であつたばかりか、婦人としてもまことに圓滿な深みのある人でした。

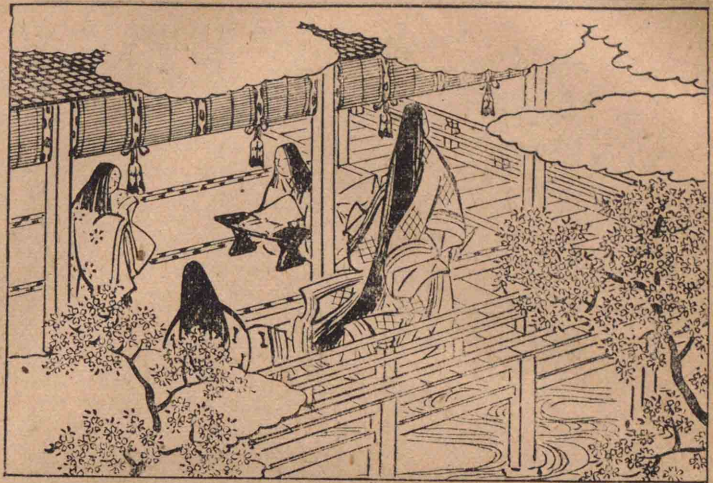
父爲時が願つたやうに、もし紫式部が男であつたら、源氏物語のやうなかな文は書かなかつたでせう。當時、かな文は女の書くもので、男は漢文を書くのが普通であつたからです。しかし、かな文であればこそ、當時の國語を自由自在に使つて、その時代の生活をこまやかに寫し出すことができたのです。かう考へると、紫式部は、やつぱり女でなくてはならなかつたのです。

源氏物語五十四帖てふは、わが國の偉大な小説であるばかりでなく、今日では、世界にすぐれた文學としてほめたたへられてゐます。

次にかかげる文章は、源氏物語の一節を簡單にして、それを今日のことばで表したものです。ただこれだけで見ても、約九百年の昔に書かれた源氏物語が、いかによく人間を生き生きと、美しく、こまやかに寫し出してゐるかがわかるでせう。

一

のどかな春の日は、暮れさうでなかなか暮れない。
きれいに作つたしば垣せうあきの内の僧庵そうあんに、折から夕日がさし



て、西側はみすがあげられ、年とつた上品な尼^{あま}さんが佛壇^{ぶつだん}に花を供へて、静かにお經を讀んでゐる。顔はふつくらとしてゐるが、目もとはさもたるさうで、病身らしく見える。そばに、二人の女がすわつてゐる。

時々、女の子たちが出たりはいつたりして遊んでゐる中に、十ばかりであらうか、白い着物の上に山吹色の着物を重ねて、かけ出して来た女の子は、何といふかはいらしい子であらう。切りそ

ろへた髪が、ともすると扇のやうに廣がつて、肩の邊にゆらゆら掛るのが、目だつて美しく見える。どうしたのか、その子が尼さんのそばへ来て、立つたまましくしく泣きだした。どうしました。子どもたちといひ合ひでもしたのですか。

といひながら、見あげた尼さんの顔は、この子とどこか似たところがある。

「雀の子を、あの犬きが逃したの。かごに伏せておいたのに。」

と、女の子は、さもくやしきさうである。

そばにゐた女の一人は

「まあ、しやうのない犬きですこと。うつかり者だから、ついでに、いゆだんをして逃したのでせう。せつかくなれて、かはいくなつてゐたのに。鳥にでも取られたらどうしませう。」

かういつて、雀をさがしに立つて向かふへ行つた。それは、この子の乳母であるらしい。

尼さんはもの靜かに、

「いやもう、あなたはまるで赤ちやんですね。どうして、いつまでもかうなんでせう。わたしがこんなに病氣で、い

つとも知れない身になつてゐるのに、あなたは雀の子に夢中なんですか。生き物をいじめるといふことは、佛様に對しても申しわけのないことだと、ふだんから教へてあげてあるでせう。さあ、ここへちよつとおすわりなさい。」

子どもは、おとなしくすわつた。尼さんは、子どもの髪をなでながら、

「櫛を使ふことをおきらひだが、それにしては、まあ何といふよい髪でせう。でも、かういつまでも赤ちやんでは困りますよ。もうあなたぐらゐになれば、もつともつとお

となしいはずです。さうさう、なくなられたあなたのおかあさんは、十二の時おとうさんをおなくしてしたが、それはそれはよく物がおわかりでしたよ。今にでも、このおばあさんがあなくなつたら、いつたいあなたはどのようなさうらうといふのでせう。」

さすがに子どもは、じつと聞きながら目を伏せてゐたが、とうとううつ伏せになつて、泣き入つてしまつた。とたん美しい髪が、はらはらと前へこぼれかかる。

二

雀の子が逃げて泣いた紫の君は、その年の秋おばあさん

に死なれて、たつた一人この世に取り残されてしまつた。

紫の君は、いとこの源氏の君のうちへ引き取られることになつた。あの乳母や犬きも、紫の君といつしよに引き移つた。

源氏は、小さな妹でもできたやうに、いろいろと紫の君のめんたうを見てやつた。紫の君も、源氏をほんたうのにおいさんだと思ふほどなつて来た。

しかし、紫の君は、やはりおばあさんのことを思ひ出しては泣くことがある。この不幸な子を慰めるために、源氏は繪をかいて見せたり、人形を求めてやつたりした。

お正月になつた。元日の朝、源氏はちよつと紫の君のゐる部屋へ行つてみた。さうして、

「どうです。お正月が来たから、あなたも少しはおとならしくなつたでせうね。」

といつた。

りつばな書棚（よみか）に、たくさんの人形や、家や車（くるま）が並べてある。紫の君は、それを部屋いつぱいにひろげて、人形遊びにいそがしい。

「豆まきをするつて、このお人形さんを犬きがこはしました。わたしがつくるつたのですよ。」

と、さも大變なことででもあるやうに、紫の君は源氏にいつた。

「よしよし。あとでりつばにつくろはせてあげよう。今

日はお正月だから、泣いてはいけませんよ。」

といつて、源氏は出て行つた。

紫の君は、人形の一つをおばあさんと呼んでゐる。お正月だから、きれいな着物を着せてあげた。

「さうさう。このおにいさんにも、いい着物を着せてあげなければ。」

さういつて、今一つの人形にも美しい着物を着せた。

「さあ、御参内だ。車にお召しください。犬きやおまへはおにいさんのお供をするのですよ。」

「はい。」と答へて次の間から出て来た犬きが、その車を引いた。

庭では、うぐひすが、美しい聲で「ほうほけきよ。」と鳴いた。

七姉

今日、ねえさんがお嫁入りをします。さう思ふと、心がちつとも落ち着きませんでした。先生のおつしやることがつい私の耳をす通りします。教室のそとは、うらかな初

夏です。屋根で雀がちゆうちゆう鳴いておます。あの雀は、のんきでいいなあ。ほんたうに、あのねえさんが、よその人になつてしまふのかしら。何だかうそのやうだ——と思つたとたん、はつとしました。先生の目が、みんなの笑つた顔が、私に集つておます。先生が、私に何かおつしやつたやうです。顔が火のやうになるのを、私は感じました。

午後、急ぎ足で学校の門を出ました。歸つてみると、入口に下駄げだが何足も並んでゐて、奥では、がやがや人聲がします。髪結ひさんが、一生けんめいに、ねえさんのお支度をしてゐるところでした。きれいに髪を結つて、晴れ着を着せら

れたねえさんは、まるでよその人のやうに見えます。分家のをばさんが、

「ああ、いいお嫁さんができました。」

といつて、ほめてゐます。おかあさんも、そばでにこにこしながら眺めてゐます。

お座敷では、山田のをぢさんとをばさんが、おとうさんや分家のをぢさんなどと話をしてゐます。

何だかさびしい氣がして、私は自分の部屋へもどりました。心を無理にしづめようとして雑誌を開きましたが、字も繪も、てんで目にはいりません。

ふすまがすうとあいて、着かぎつたねえさんがはいつて來ました。

「雪ちゃん。」

少しかすれた聲でした。

「ねえさん、おめでたう。」

やつとこれだけが、私の口から出ました。

「ありがたう。私がおなくなつても、さびしからないうで、よく勉強してくださいね。」

「はい。」

さういへば、よくねえさんにいろいろ教へていただいたも

のでした。

「生まれた家を出て行くのです。どうぞ私に代つて、おとうさんやおかあさんを、だいじにしてあげてくださいいね。おかあさんは、さうお丈夫ではないんですから。」

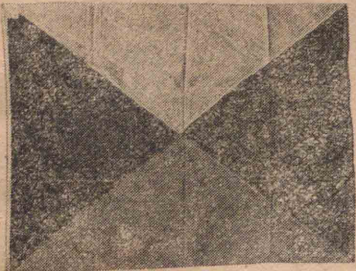
私はだまつてうなづきました。「ねえさん、これまでずあぶんわがままをいつてすみませんでした。――それがのどまで出てゐるのですけれど、とうとういへないでしまひました。」

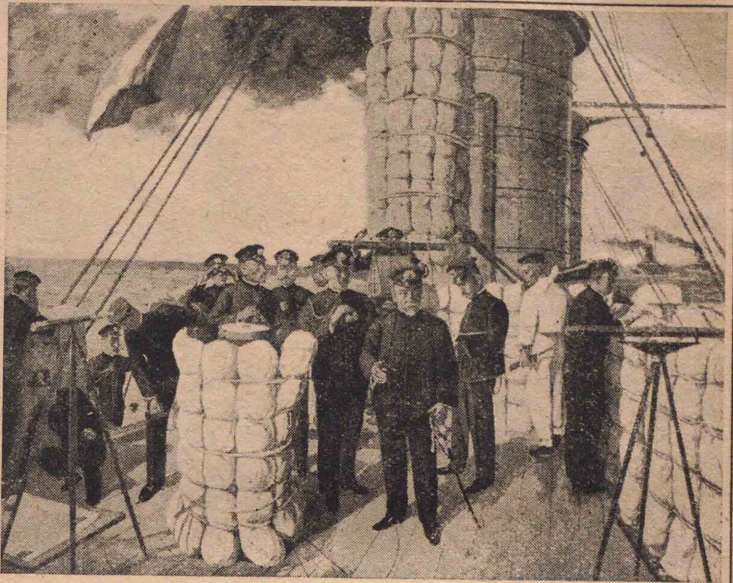
夕方、迎への車が來ました。ねえさんは、山田のをぢさんをばさんといつしよに、車に乗りました。

その夜、おとうさんも、おかあさんも、口ぐせのやうに「めでたい、めでたい。」といひながら、話はとだえがちでした。にいさんだけが、時々おどけたことをいつて、みんなを笑はせました。

八 日本海海戦

露國が連敗の勢を回復せんため、本國における海軍のほとんど全勢力を擧げて編成せる太平洋第二第三艦隊は、今や朝鮮海峽を経て、ウラジオストックに向かはんとす。わが海軍は、初





艦をして、敵艦隊を沖島附近（おきのしま）にいざなひ寄せしむ。

午後一時五十五分、わが旗艦三笠（みかさ）は、戦闘旗をかかぐると

ともに、信號旗を以て令を各艦にくだせり。いはく、

「皇國の興廢（こうはい）此の一戦にあり。各員一層奮勵（いっそうふんれい）努力せよ。」

と。わが軍の士氣大いに振るふ。三笠に乗れる東郷司令長官は、六隻の主戦艦隊を率ゐて、上村艦隊とともに先頭なる敵の主力に當り、片岡出羽（ては）瓜生東郷（うりう）（正路）の諸隊は、敵の後尾をつく。

敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、われは急にその前路をさへぎり、距離六千メートルに至りて始めて應戦し、激しく敵を砲撃せしかば、敵の艦列たちまち亂れ、早くも戦列を離るるものあり。

風叫び海怒りて、波は山のごとくなれども、沈着にして熟練なるわが砲員の撃ち出す砲弾は、よく敵艦に命中して續續火災を起し、黒煙海をおほふ。午後二時四十五分、勝敗すでに定まれり。敵は算を亂して逃れ去らんとす。われはこれに乗じてすかさず攻撃せしかば、敵の諸艦皆多大の損害をかうむり、續いてわが驅逐隊及び水雷艇隊の魚雷攻撃を受けて、敵の兩旗艦を始め、その他の諸艦も多く相ついで沈没せり。夜に入りて、わが驅逐隊水雷艇隊は、砲火をくぐつて敵艦にせまり、無二無三に攻撃せしかば、敵艦隊は四分五裂れつのありさまとなれり。

明くれば二十八日、天よく晴れて海上波靜かなり。わが艦隊は、東郷司令長官の命により、おほむね鬱陵ウリョウ島附近に集りて敵を待ちしが、たちまち片岡隊の東方はるかに數條の黒煙を見る。よりて主戦艦隊及び巡洋艦隊は、直ちに東方へ向かつて敵の進路をふさぎ、片岡瓜生東郷の諸隊はその退路を絶ちて、午前十時十五分、たたく敵を包圍せり。敵將ネボカトフ少將、今は逃れぬところと覺悟したりけん、にはかに戦艦ニコライ一世以下四隻を擧げて、その部下とともに降服せり。

敵の司令長官ロジエストウエンスキー中將は、きのふの

戦鬪に傷を負ひ、幕僚とともに一驅逐艦に移りしが、わが驅逐艦連陽炎の二隻に追撃せられ、つひに捕らへらるるに至れり。

この兩日の戦に、敵艦の大部分は、わが艦隊のためにあるひは撃沈せられ、あるひは捕獲せられて、三十八隻のうち逃れ得たるもの、巡洋艦以下數隻のみ。敵の死傷及び捕虜は、司令長官以下一萬六百餘人。わが軍の死傷はなほだ少く、艦艇の沈没したるもの、わづかに水雷艇三隻に過ぎず。

東郷司令長官の發せし戦況報告の末尾にいはく、

「我が聯合艦隊が、能ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇績ヲ收メ得タルモノハ、一二天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキニアラス。特ニ我が軍ノ損失死傷ノ僅少ナリシハ、歴代神靈ノ加護ニ由ルモノト信仰スルノ外ナク、曩ニ敵ニ對シ勇進敢戦シタル麾下將卒モ、皆此ノ成果ヲ見ルニ及ンデ、唯々感激ノ極言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

と。勝報上聞に達するや、司令長官にたまへる勅語の中に、「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ、祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌フ。」

と仰せられたり。將兵すべて感泣せざるはなかりき。

九 鎮西八郎爲朝

一

爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角二つに切れたるが、紺地に獅子の丸を縫ひたるひたたれに、同じく獅子の金物打つたる甲を着、三尺五寸の太刀に、熊の皮のしりぎや入れ、五人張りの弓長さ七尺五寸なるに、三十六さしたる黒羽の矢を負ひ、かぶとを郎等に持たせて歩み出でたるさま、いかなる鬼神といへども恐れずといふことなし。

左大臣頼長、爲朝に向かひ、

「合戦のこと計らひ申せ。」
とあれば、かしこまつて、

「爲朝、久しく鎮西に居住仕り、九國のものども討ち從へ候について、大小の合戦數を知らず、中にもせつかくの合戦二十餘箇度に及ぶ。敵に圍まれて強陣を破るにも、城を攻めて敵を滅すにも、利を得ること夜討にしくこと候は



ず。されば、ただ今敵方に押し寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を逃れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を逃るべからず。ただ兄にて候義朝よしともなどこそ、かけ出で候はめ。それも一矢にて、真中を射通し候はん。まして清盛きよもりなどがへろへろ矢、何ほどのことか候べき。甲の袖にて拂ひ、けちらして捨て候はん。爲朝が矢二つ三つ放さんばかりにて、いまだ天の明けざる前に勝負を決すること、何のうたがひも候はず。と、はばかりと、ころなく申しけり。左大臣、

「爲朝が申しやう、以ての外に手荒き儀なり。年の若きが

致すところか。夜討などいふこと、汝らが同士軍、十騎二十騎の私ごとなり。源平數を盡くして勝負を決せんこと、決してしかるべきにあらず。」

といひければ、爲朝まかり立つてつぶやきけるやう、

「合戦の事は武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ、いかがあらん。義朝は武略の奥義を極めたるものなれば、定めて今夜寄せてぞ來たらん。ただ今押し寄せて、風上に火をかけたらんには、戦ふともいかで利あらんや。くちをしきことかな。」とぞ申しける。

二

大將源義朝は、赤地錦のひたたれに、黒糸をどしの甲着て、
鍬形打つたるかぶとをつけ、黒馬に黒くら置いて乗つたり
けり。あぶみふんばり突つ立ちあがり、大音あげて、

「清和天皇九代の後胤、下野守源義朝、大將としてまかり向
かふ。もし一家の氏族ならば、すみやかに陣を開いて退
散すべし。」

といふ。爲朝聞きもあへず、

「御方の大將たる父判官の代官として、鎮西八郎爲朝、一陣
を承つて堅めたり。」

と答ふ。義朝重ねて、

「さては、遙かの弟にこそあれ。汝、兄に向かひて弓を引く
ことあるべからず。禮儀を知らば、弓を伏せて降参仕れ。」
とぞいひける。爲朝、

「兄に向かつて弓引かんことあるべからずとは、道理なり。
まさしく父に向かつて弓引きたまふはいかに。」

といひければ、義朝、道理にやつまりけん、そのちは音もせ
ず。

武藏相模のつはものども、まつしぐらに打つてかかる。
爲朝、しばし支へて防ぎけるが、敵は大勢なり、かけへだてら

れては父のために悪しかりなると思ひて、門の内へ引く。
敵これを見て、防ぎかねて引くとや思ひけん、勝ちに乗つて
門の際まで攻め寄せ、入れかへ入れかへ、もみ合ひけり。

ここに爲朝、敵の勢越しに見れば、大將義朝は、大の男の大
きなる馬には乗つたり、軍の下知せんとして、突つ立ちあがり
たる内かぶと、まことに射上げに見えたり。願ふところの
幸ひと、例の大矢を打ちつがひ、ただ一矢にて射落さんとし
けるが、待てしばし、弓矢取る身のはかりごと、汝負けばわれ
をたのめ、われ負けば汝をたのまんなど、父と兄と約束して、
敵御方に別れおはすらんか」と思案して、つがひたる矢をさ
しはづす。心のうちこそ神妙なれ。

爲朝、須藤すどうの九郎を呼びて、

「敵は大勢なり、もし矢盡きて打物にならば、一騎が百騎に
向かふとも、つひにはかなふべからず。阪東武者のなら
ひとて、大將の前には親死に子討たるるともかへりみず、
いやが上にも死に重なつて戦ふと聞く。いざさらば、大
將に矢風を負はせ、引き退けんと思ふは、いかに。」

といへば、九郎、

「しかるべく候。ただし、御あやまりも候はん。」
と申す。

「何とてさることのあらん。為朝が手並みは、汝も知りたるものを。」

とて、例の大矢を打ちつがひ、堅めてひようと射る。思ふねらひをあやまたず、矢はかぶとの星を射けつづつて、後なる門の柱にぐざと突き立つたり。

義朝、手綱はいくり為朝に向かひ、

「汝は、聞きしにも似ず手こそ荒けれ。」

といへば、為朝、

「兄にておはす上に、思ふところありてわざとかく仕りて候。まことに御許しあらば、二の矢仕らん。」

とて、すでに矢取つてつがふところに、上野かうづけの國の住人深巢ふかすの七郎、つとかけ出でければ、為朝これをはたと射る。かぶとの板を筋かひに、左の耳もとへぐざとばかり、矢のなかばまで射込みたれば、七郎はしばしもたまらず死にてけり。須藤の九郎つと寄りて、深巢が首を取る。

十 晴れ間

さみだれの晴れ間うれしく、

野に立てば

野はかがやきて、

白雲を

通す日影に、

はや夏の暑さをおぼゆ。

行く水は少しにけれど、

せせらぎの

音もまさりて、

よろこびを

歌ふがごとく、

行くわれを迎ふるごとし。

田園のつづく限りは、

植ゑわたす

早苗さなへのみどり。

山遠く

心はるばる、

天地の大いなるかな。

ふと見れば、道のほとりに、

つつましき

姿を見せて、

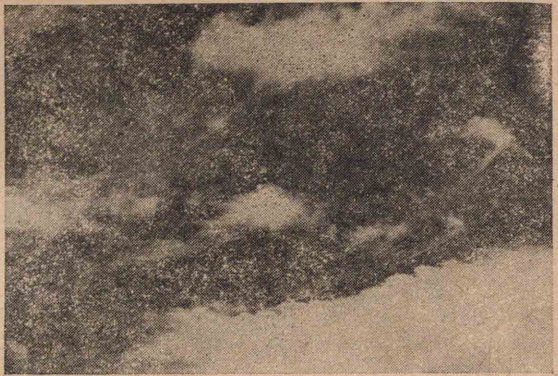
濃きるりの

色あざやかに、

咲くものは露草の花。

十一 雲のさまさま

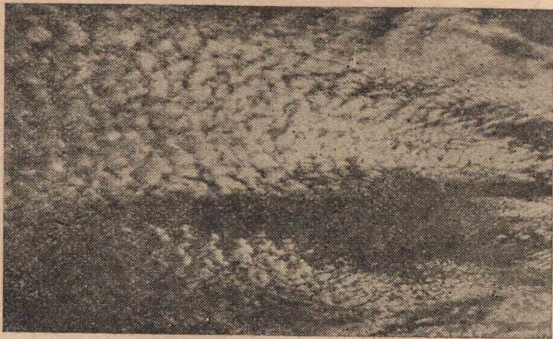
澄んだ青空には、はげで軽くはいたやうな、または真綿を薄く引き延したやうな白い雲の出るのを、巻雲といひます。ごくこまかな氷の結晶の集つたもので、雲の中でもいちばん高く、八千メートルから一萬二千メートルの高さに、浮かんでゐます。どこまでもこまやかですつきりした感じの雲です。天女の軽い舞の袖を思はせるやうな雲です。



ところで、この雲がだんだんふえてひろがりだすと、すつきりした感じがなくなつて、形がぼやけて來ます。のちには、ごく薄い、白い絹か何かで空をおほつたやうになります。ですから、俗に薄雲といひます。太陽や月が、大きなかさを着るのは、この雲のかかつた時で、かきの中に星が見えれば、天氣さうでなければ、雨だなどといひます。とにかく、そ

ろそろ天氣がくづれるなど思はせるのが、この雲です。

青空にうろこのやうに群生する白い雲は、さばの斑點はんてんに



似てゐるのでさば雲といひ、またこの雲が出るといわしの大漁があると、いふので、いわし雲ともいひますが、見たところはさびしい雲です。夜、この雲の續く果に、半月がうつすらとかかつてゐるのは、殊にさうした感じを深くします。天候惡變の兆しるしといはれる雲で、そばに黒い雲が龍りゅうのやうに續いてゐる場合には、雨の近いことほとんど受合ひだといひます。

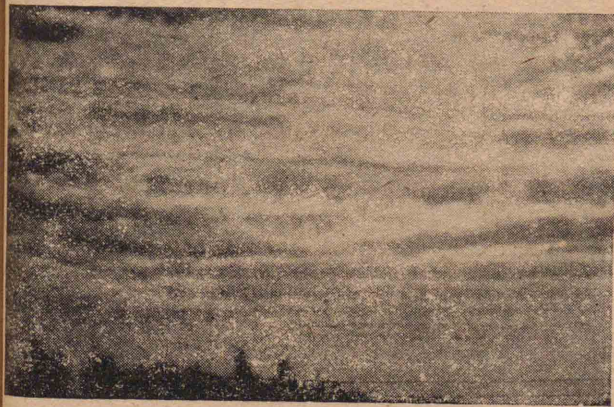
いわし雲よりぐつと大きな塊になつて、群生する白い雲があります。俗にむら雲といつてゐますが、西洋ではよく牧場の群羊にたとへます。青空に綿を大きくちぎつて、あとからあとから投げ出したやうで、なかなか盛んな感じのする雲です。

いわし雲がぐんぐんふえて來ると、空一帯が灰色になつて、何だか頭を押さへつけられさうになります。太陽でも月でも、おぼろにしか見えません。照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月とは、かういふ雲のかかつた場合ですが、このおぼろ雲は、天候の前兆としては、いよいよ悪い方だ

といひます。

むら雲おぼろ雲は、巻雲や、薄雲、いわし雲などより低く、四五千メートルのところ、に浮かんでゐます。

青空に、薄黒い雲がみなぎることがあります。雨雲に似てゐますが、どこどころに青空が見え、雲の端々が白く見えて、その間から日光がもれたりします。もくもくと大きくかたまつたり、また時にそれが島のうねのやうに、天の一方から他方へ幾條か連なつたりすることが

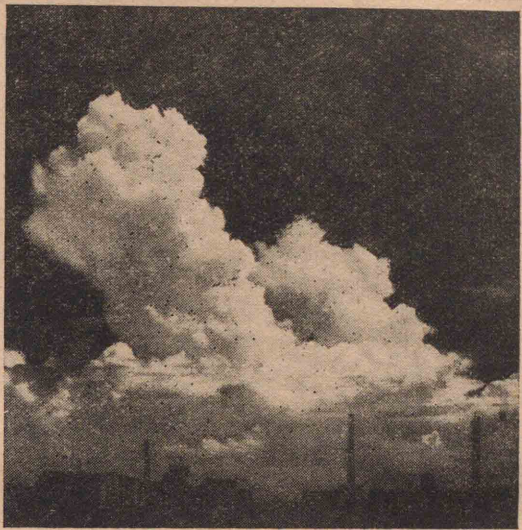


あります。曇り雲とか、ね雲とかいはれる雲です。

雨雲はきまつた形がなく、空いつぱいに薄黒くおぼろもので、亂雲と呼ばれてゐます。いちばん陰氣で、いやな感じの雲であることはいふまでもありません。曇り雲と同じく、二千メートル以下にある雲です。

雨の降つたあげく、山の間などから流れるやうにすべり出る白い雲は、層雲といつて、雲の中でもいちばん低い雲です。高さは五百メートルぐらゐですから、まつたく手に取れさうに見えます。

天氣のよい日、底が平で、上が山の峯のやうに積みあがつ



た形に現れる白い雲は、積雲といひますが、夏の日など、峯が恐しいほどむくむくとふくれあがつたのは、俗にいふ入道雲です。強烈な日光に照らされた入道雲が、まぶしいほど、銀白色または銀鼠色ぎんねずにかがやくのを見ると、雲の王者といひたい感じがします。俳句で「雲の

峯といふのも、この入道雲です。積雲は二千メートル以下の高さですが、入道雲の頂になると、六千メートルから八千メートルの高さになります。その頂が開いたのは、朝顔雲とか、かなとこ雲とかいつて、雷雨を起したり、時にひょうを降らしたりします。一天にはかに墨を流したやうに曇つて、天地も暗くなるのは、かうしたすばらしく厚い雲によつて、日光がさへぎられるからです。卷雲のかぼそい女性的な美しさに比べると、積雲や、入道雲や、かなとこ雲はいかにも壮大で、強烈で、男性的です。

十二 山の朝

ふと、目がさめる。

遠くの方から、小鳥の聲が枕もとへ流れるやうに聞えて

来る。まだなかば眠りからさめない心のうちに、山の夜明けだといふことが浮かぶ。

はね起きて窓を開いた。つめたい空気が吸ひつけられるやうに室の中へしのびこむ。首筋に水晶のはげがさばつたやうなつめたさである。まだ朝の太陽はのぼつてゐない。薄明の天地の中で、山々の薄黒い姿がだまつて眠つてゐる。

山小屋の重い戸びらを音もなく開き、素足すあしに草履ぞうりをはいて、露深い草の小道におり立つ。生き生きとした小鳥の聲が、あたりの静けさをふるはせて、頭の上から降り注いで来る。このにぎやかな聲の絶え間を縫つて、どこからともなく、つつましやかな小川のせせらぎの音が、かすかに聞えて来る。

山からわき流れる清水しみずが、かけひをまつしぐらにかけ抜けて通る。玉のやうな清らかな水を両手にすくひあげると、こぼりつくやうなつめたさが全身にしみとほる。この水で口をすすぎ顔を洗ふと、心の底までが清められるやうな氣持がする。胸を張つて、思ひきり深く朝の山の空気を吸ふ。

山小屋の前の小道をくだつて行くと、そよ風が頬ほほにここ

ちよいい。ならかへでぶなくりなどの木々が茂り合つて、頭の上を自然の天蓋てんがいでかざつてくれる。夜明けに近い薄あかりが、重なり合つた葉の層を通して落ちて来る。緑色のガラスを張りめぐらした部屋の中に、たたずんであるやうである。一々の鳴き声を聞きわけることができないやうに、鳥の聲がにぎやかに聞えて来る。短い鋭さの中にも、どこかやさしさのある小鳥の聲に混つて、太く口の中でふくんだやうに鳴く山鳩の聲が聞えて来る。その間を際立つてくつきりと、うぐひすの聲がころがるやうに續いて走る。この美しい木々の緑と、さわやかな鳥の聲のごちそうを前にして、しんせつな山のお招きの席に、しばらくは、すべてを忘れて立つてみた。

林の中を、奥へ奥へと進んで行くにしたがつて、小川のせせらぎはだんだん高く聞えて来る。林を出はづれて、頭の上の緑のおほひが盡きてしまった時、いつのまにのぼつたのか、朝の日の光が、石を嚙かんで流れる水の上にをどつてある。

危ふげにかけ渡された一本の丸木橋の上を、靜かに渡る。この丸木橋に立つて、朝の太陽の前に身じまひを正し始めた高い山々の針葉樹林を見あげる。きりのやうにとが

た梢の先を天に向けて真直に立つものはかうやまきである。ふさふさした枝の冠をいただいて立つてゐるのは檜である。

この深山の朝の靈氣にふれるため、私はここまでのぼつて來たのだ。

十三 燕岳に登る

「出發」

山田先生の聲が、中房温泉旅館の庭に勇ましく響き渡つた。午前七時である。きのふの雨はからりと晴れて、太陽はほがらかにこの温泉の谷間を照らしてゐる。

ルツクサツク水筒金剛杖の身支度もかひがひしく、ぼくらは、小鳥のやうにをどる胸を押さへながら、つり橋を渡つた。ごうごうと鳴る激流の上に、高い橋がぐらぐら動くのが愉快でたまらなかつた。

道はすぐ登りになる。かちりかちりと、杖が岩に鳴つた。前の人の足あとをふみしめるやうに、一步一步登つて行く。せまい道の兩側には、大きなささが、ぼくらの頭をおほふくらゐ高く茂つてゐた。

岩角が出、木の根が横たはつてゐる。

「氣をつけろよ。」

と、前の方で聲がする。額も、せなかも、汗ばんで来た。はずむ呼吸が、前にも後にもはつきり聞かれる。

かうして、つづら折りの明かるい山道を、あへぎあへぎ登った。時々見おろす谷底に、さつき出發した温泉宿が、だんだん小さくなつて行く。谷川が、下で遠く鳴つてゐる。ついで向かふに、ぐつと見あげるほどそびえ立つてゐるのが、有明山である。

「今日はあの山よりもつと高く登るのだぞ。」
と、石川先生がいはれた。

まばらな潤葉樹林を通して、太陽がじりじりと照りつける。帽子の下からわき出る汗が、顔を傳つて流れ落ちる。息が苦しいほどはずむ。

「先生、休んでください。」
と、後の方でいつしか悲鳴をあげる。

「もう少しがんばれ。」
と、前の方でませかへす。

まもなく、びりびりとうれしい笛が鳴った。みんなは待つてゐたやうに、そこらへ腰をおろして汗をふく。水筒の水を飲むと、のどがぐくりと鳴った。木の間ではうぐひす

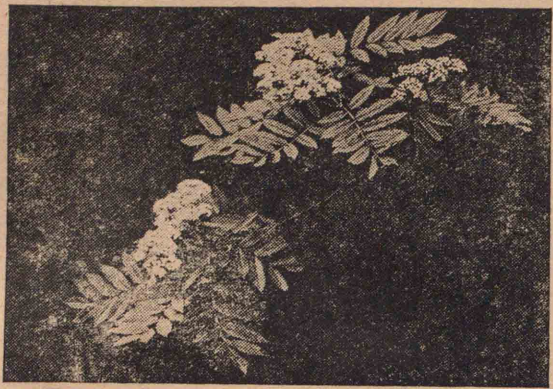
が鳴いてゐる。谷底から吹きあがる風が、はだに快く感じ
る。

そろそろ、針葉樹が現れて来た。

やがて針葉樹の密林へはいると、急に快い涼しさを覺え
る。時に「さうしかんば」のはだが、稍からもれる太陽の光に
映じて、薄暗い中に銀色に光る。道はいくぶんなだらかに
なつたり、またぐつと急になつたりする。きのふの雨でじ
めじめして、うっかりすると足がすべる。木の根、岩角を數
へるやうに、ふみしめふみしめ登つた。

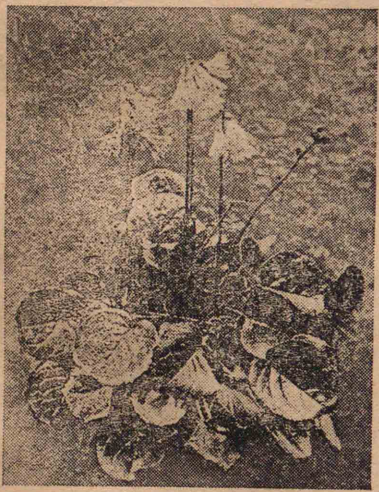
「あと四キロだ。」

と先頭で叫ぶ。道標の數字がしたいにへつて行くのが、力
と頼まれる。時々休んでは、また勇氣を振るひ起す。



植物に、變つたものがあるやうになつ
た。葉がふちに似た「ななかまど」や、大木
から長くひげのやうにぶらさがる「さる
をがせ」などを、石川先生に教へてもらつ
た。かはい桃
色の「いはかがみ」

の花を、道端に見つけるのが樂し
みであつた。



あたりにだんだん霧がわいて来て、大木の幹を、かなたへかなたへと薄く見せた。耳を澄ますと、遠く近く、さまざまの小鳥のさへづりが聞かれる。

かうして、とうとう合戦小屋にたどり着いたのが午前十一時、みんなはずあぶんつかれてゐた。ここで辨當をたべる、そのおいしいこと。

空がしだいに曇つて来た。霧もだんだん深くなる。しかし、小屋の人は、

「天氣は大丈夫です。」

と、先生たちについてゐた。

それからもしばらく道が急だつた。

霧の間に、さうしかんばの林が続く。道端には、ささがめづらしく花をつけてゐた。

いつのまにか大木が少なくなつて、せいの低い細い木が目につくやうになつた。つひにはそれもなくなつたと思ふと、眼界が急に開けて、山腹の斜面に、低い緑の「はひまつ」が波のやうに續いて見えた。みんなが、わいわい歡聲をあげた。道は、ややなだらかになつた。

「三角點。」

といふ聲がする。ぼくらは、胸がをどつた。

やや広く平なところに、三角點を示す石があつた。そばに腰掛が何臺かある。中房温泉から四六キロと記した道標が立つてゐる。頂上まであと二キロだ。

晴れてゐれば、ここから今登らうとする燕の絶頂も、槍岳やりがたけその他の山々も見えるさうだが、今日は何も見えない。行手の道も「はひまつ」も、すべて夢のやうに霧の中に薄れてゐる。ただ、天地がいかにも明かるかつた。

それから尾根傳ひに、なだらかな道が續いた。薄日がぼかぼかとせなかを温める。道端は、「はかがみ」の花盛りであつた。小さなすみれや、蘭らんもところどころに咲いてゐる。

どれもこれも、すき通るほどあざやかな色であつた。ふと「はひまつ」の間に、高さ一メートルにも足らない「たかねざくら」が、今を盛りと咲いてゐるのを見た。眞夏に櫻の満開である。



「山は、今春なのだ。」と、石川先生がいはれた。みつばちが、盛んに花から花へ飛んでゐた。行くにしたがつて、花は美しかつた。右手に見おろす斜面に咲き續く黄色な花は、大きなのが「しなのきんばい」、小さな

のが「みやまきんぼうげ」であつた。
 その間々に、白い「ほくさんいちげ」や、
 深紅の「べ」にはない「ちご」などが、點々
 と入り亂れてゐた。お花畠は、まるで
 満天の星のやうに美しかつた。



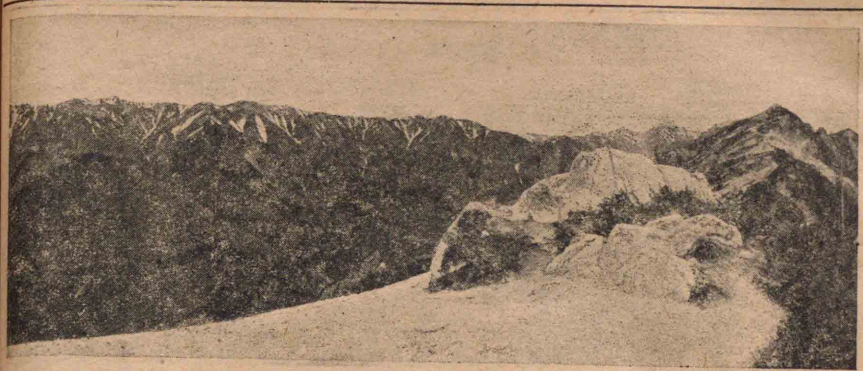
その邊から、どころどころに残雪があつた。みんなが、うれしがつて雪をすくつた。

つひに、霧の中に近く山小屋を見あげるところへ来た。下から風が強くと吹きあげる。足もとには、かなり大きな雪けい溪が見おろされた。

先頭は、もう山小屋の右下の鞍部かたがにたどり着いた。「早く来い。向かふは晴れて、山がすてきたぞ。」

と、だれかが帽子を振りながら、ぼくらに叫んでゐる。やがてそこへ登り着いたぼくらは、何といふすばらしい景色を、西の方に見渡したことであらう。

左端の穂高に續いて、槍岳が、それこそ天を突く槍の穂先のやうに突き立つてゐる。更に右へ右へとのびる飛驒山脈れんげが、蓮華れんげ・鷺羽わしは・水晶・五郎と、大波のやうに、屏風びやうぶのやうに、紫紺のはだあざやかにそそり立ち、うねり續く雄大莊嚴な姿。ところどころに白雲がただよつて、中腹をおほひ、峯をかく



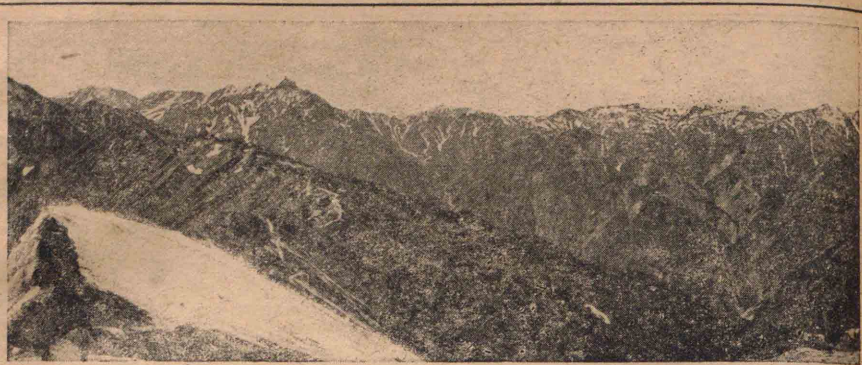
し、谷々の雪溪と相映じて、山々を奥深く見せる。ぼくらが今立つてゐるところと向かふの山脈との間は、千丈の谷となつて、その底に高瀬川たかせの鳴つてゐるのが、かすかに聞えて来る。この大自然がくりひろげる景觀に打たれて、ぼくらはほとんど一種の興奮を感じるほどであつた。

そこから右へ縦走して、燕の絶頂をめざした。

馬の背のやうに、峯傳ひの道が續いてゐ

た。ややもするとかくづれようとする砂と岩との間を、はひまつにすがりながら進んだ。右下から吹きあげる風は、もうもうと雲を巻きあげて、それがこの尾根を界に消散する。それは、ふしぎに思へるほどはつきりとしてゐた。左は、急な斜面が神秘的な谷底へ深く落ち込んでゐる。

とうとう、燕の絶頂が来た。それは、大空の一角にそそり立つ御影石の岩塊である。そこは、十人とは乗れないほどせまかつた。



今こそ、二千七百六十三メートルの最高點に立つたのである。さつきの槍岳が「ここまでお出で」といふやうに、しかしかにも嚴然とそびえてある。あの絶頂へ登る傾斜は、少くとも四十五度以上はあらう。

「あんな山へ登れる人があるのかなあ。」

といふと、元氣な山田先生は、

「もう二三年たつたら、きみたちも槍へ登れるよ。」
といはれた。

東も北も一帯に雲がとぎして、ぼくらの村はもとより、富士、しろうま浅間、白馬、立山等の姿を見ないのが、まつたく残念であつた。

午後二時、下山の途についた。

「山は広い」とぼくはつくづく思つた。さうして何年かのうちに、きつとあの槍に登らうといふ希望をいだきながら、山をくだつた。

十四 北千島の漁場

北海道本島でにしんの漁期の終る五月下旬から、そろそろ北千島の漁場が活氣を帯びて来る。その前後けなげにも、十人乗りそこそこの發動機船が、本島をあとに、六百海里

の北を望んで、續々と出て行く姿を見るであらう。幸ひにしてこのころは、割合ひなぎの日が多い。

ここ北千島の一角を根據地とする二百隻の流し網出漁船は、いま出動準備の最中である。發動機の調子をしらべたり、網の支度をしたり、特に船長たちは、晴雨計と空模様もやうを熱心に見比べてゐる。見渡す限りは、午後の静かな海である。

やがて、船は爆音高く根據地を出て行く。思ひ思ひに沖へ快走してかれこれ三時間、もつぱらさけやますの泳ぎまはつてゐさうな場所をさがして、投網にかかる。ぐつと速度を落しながら一直線に進む船のともから、網がしだいにくり出されて、その長さが約五千メートル。この作業が終るころは、日没のおそい北洋にも夕暮がだんだんせまつて、濃霧が一面に立ちこめる。たまたま遠くからただよふやうに汽笛が聞えて来るのは、カムチャツカ沿岸へ行く汽船であらうか。一種のあこがれに似たなつかしさを覚えさせる。

「網の綱をしつかりつないでおくんだぞ。今夜はなぎらしいが、水溫や潮の流れはどうだい。」

「水溫は紅ますに適度、潮の流れは餘り速くないやうです。」

「ゆうべより少し沖へ出たな。きつと大れふだぞ。」
濃霧がもうもうと立ちこめて、網の綱の端につけた目じ
るしのランプも、光がぼんやりと見える。船は發動機を止
めたまま、網もろともに、夜明けまで潮のまにまに任せるの
である。かうして、北洋にただよふ小船のせま苦しい船室
に、しばしの夢が結ばれる。

午前二時ごろ、もう東の空が白み始める。

「おい、網をあげるんだ。」

船長の聲に、防水具に身を固めた若者たちが、船室から出て
来る。明け方の風はいやといふほどつめたい。

「よいしよ、こらしよ。」

元氣のよい掛聲だ。網を引きあげる片端から、海面にさざ
波が起る。網の糸も切れるばかり、大きなますや、さけがか
かつてあるのだ。

力強くたぐりながら、なれた手つきで魚をはづす。見る
見る甲板はますさけの山。かうした作業が五時間も續い
て、一萬尾に近い漁獲に船は満載である。濃霧がだんだん
薄れて、太陽が洋上ににぶい光を投げかける。

船は、思ひ切り吃水深く、残雪をいたたく島山の峯を目當
てに、根據地へと波を切つて行く。

十五 われは海の子

われは海の子、白波の
さわぐいそべの松原に、
煙たなびくとまやこそ、
わがなつかしき住みかなれ。

生まれて潮にゆあみして、
波を子守の歌と聞き、
千里寄せくる海の氣を
吸ひて童となりにけり。

高く鼻つくいその香に、
不斷ふたの花のかをりあり。
なぎさの松に吹く風を、
いみじき樂とわれは聞く。

丈餘のろかいあやつりて、
ゆくて定めぬ波まくら、
ももひろちひろ海の底、

遊びなれたる庭廣し。

いくとせここにきたへたる

鐵より堅きかひなあり。

吹く潮風に黒みたる

はだは赤銅しゃくどうさながらに。

波にただよふ氷山も、

來たらば來たれ、恐れんや。

海巻きあぐる龍巻も

起らば起れ、おどろかじ。

いで大船を乗り出して、

われは拾はん海の富。

いで軍艦に乗り組み、

われは護らん海の國。

十六 月光の曲

ドイツの有名な音楽家ベートーベンが、まだ若い時のことであつた。月のさえた夜、友人と二人町へ散歩に出て、薄

暗い小路を通り、ある小さなみすぼらしい家の前まで来ると、中からピアノの音が聞える。

「ああ、あれはぼくの作った曲だ。聞きたまへ。なかなかうまいではないか。」

かれは、突然かういつて足を止めた。

二人は戸外にたたずんで、しばらく耳を澄ましてみたが、やがてピアノの音がはたとやんで、

「にいさん、まあ何といふいい曲なんでせう。私には、もうとてもひけません。ほんたうに一度でもいいから、演奏會へ行つて聞いてみたい。」

と、さも情なささうにいつてゐるのは、若い女の聲である。

「そんなことをいつたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。」
と、兄の聲。

「はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。」

ベートーベンは、急に戸をあけてはいつて行つた。友人も續いてはいつた。

薄暗いらふそくの火のもとで、色の青い元氣のなささうな若い男が、靴を縫つてゐる。そのそばにある舊式のピアノによりかかつてゐるのは、妹であらう。二人は、不意の來

客に、さも驚いたらしいやうすである。

「ごめんください。私は音楽家ですが、おもしろさについて、つり込まれてまゐりました。」

と、ベートーベンがいった。妹の顔は、さつと赤くなつた。兄は、むつつりとして、やや當惑たうわくのやうすである。

ベートーベンも、われながら餘りだしぬけだと思つたらしく、口ごもりながら、

「實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが——あなたは、演奏會へ行つてみたいとかいふことでしたね。まあ、一曲ひかせていただきませう。」

そのいひ方がいかにもをかしかつたので、いつた者も聞いた者も、思はずにつこりした。

「ありがとうございます。しかし、まことに粗末なピアノで、それに楽譜もございませんが。」

と、兄がいふ。ベートーベンは、

「え、楽譜がない。」

といひさしてふと見ると、かはいさうに妹は盲人である。

「いや、これでたくさんです。」

といひながら、ベートーベンはピアノの前に腰を掛けて、すぐひき始めた。その最初の一音が、すでにきやうだいの

耳にはふしぎに響いた。ベートーベンの兩眼は異様にかがやいて、その身には、にはかに何者かが乗り移つたやう。一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてあるか、かれ自身にもわからないやうである。きやうだいは、ただうつとりとして感に打たれてゐる。ベートーベンの友人も、まつたくわれを忘れて、一同夢に夢見るここにち。

折からともし火がぱつと明かるくなつたと思ふと、ゆらゆらと動いて消えてしまつた。

ベートーベンはいく手をやめた。友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入り込んで、ピアノのひき手の顔を照らした。しかし、ベートーベンはただだまつてうなだれてゐる。しばらくして、兄は恐る恐る近寄つて、

「いつたい、あなたはどうかいふお方でございますか。」

「まあ、待つてください。」

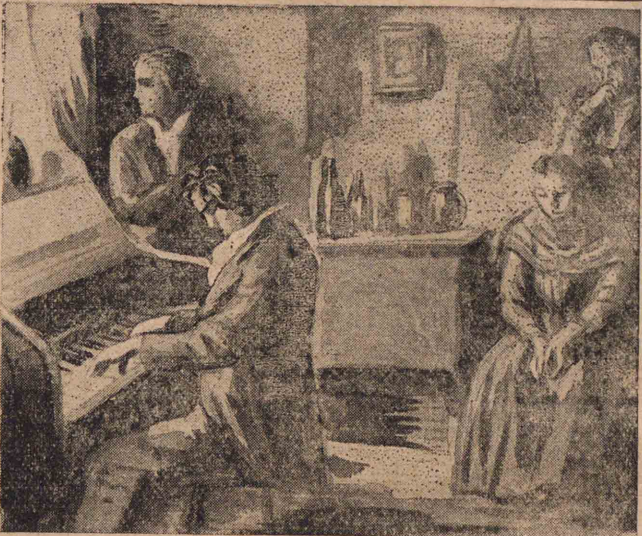
ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲をまたひき始めた。

「ああ、あなたはベートーベン先生ですか。」

きやうだいは思はず叫んだ。

ひき終ると、ベートーベンはつと立ちあがつた。三人は

「どうかもう一曲」としきりに頼んだ。かれは再びピアノの前に腰をおろした。月はますますさえ渡つて来る。



「それではこの月の光を題に一曲」といつて、かれはしばらく澄みきつた空を眺めてゐたが、やがて指がピヤノにふれたと思ふと、やさしい沈んだ調べは、ちやうど東の空にのぼる月が、しだいにやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度はいかにもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄り集つて、夜の芝生にをどるやう、最後はまた急流の岩に激し、荒波の岩に碎けるやうな調べに、三人の心は、驚きと感激でいつぱいになつて、ただぼうつとして、ひき終つたのも氣づかないくらゐ。

「さやうなら。」

ベートーベンは立つて出かけた。

「先生、またおいでくださいませうか。」

「さやうだ、いは、口をそろへていつた。」

「まゐりませう。」

ベートーベンは、ちよつとふり返つてその娘を見た。

かれは、急いで家へ歸つた。さうして、その夜はまんじりともせず机に向かつて、かの曲を譜に書きあげた。ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博したのはこの曲である。

十七 いけ花

まさえさん、この間は、お手紙をありがたうございました。おとうさんも、おかあさんも、お元氣ださうで安心しました。こんなに遠く離れてあると、うちのこと何よりも知りたかったのですよ。

私も、こちらへ来てからもう一年近くなりますが、これまで病氣一つしませんでした。毎日毎日畠へ出て働いてゐることが、私をこんなに丈夫にしてくれたのでせう。それとも、大陸の氣候が私に合ふのかも知れません。

この一年間は、何を見ても、何をして、始めてのものばかりで、めづらしいやら、楽しいやら、まるで夢のやうに過ぎて來ました。

この春植ゑつけた野菜類は、たいそうよくできて、この間一部分だけ收穫しました。その時にうつした寫眞を同封しておきましたから、見てください。いろいろな野菜があ

りますから、何だかあててごらん下さい。

お手紙によると、このごろまさえさんは、熱心にいけ花のおけいこをしてあるさうですね。せんだつて、おかあさんからのお手紙にも、そのことが書きそへてありました。私のおいて来た花ばさみや花器などが、そつくりまさえさんの手で、かはいがられてあると思ふと、たいそううれしい氣がします。

私もいけ花がすきなもので、いそがしい中にも、ずつと續けてやつてゐます。

つい四五日前も、野原でききやうの花を見つけたので、それを摘んで来ていけてみました。こんなにして野の草花をいけたりすると、その昔、まさえさんと二人で、野原へ花摘みに行つた時のことが、なつかしく思ひ出されました。

「ぼらんを、何度も何度もいけるのは、あきてしまひました。」と書いてありました。が、あれはいけ花のいちばんもどになるものですから、しつかりとおけいこをしておかなければなりませんよ。何を覚えるにしても、そのもどをのみこむことが大切だと思ひます。もどといつても、形ばかりでなく、いつも自分の心がこもつてゐなければなりません。

いけ花ほど、いける人の氣持のよく現れるものはないと、

自分ながらびつくりすることがあります。例へば何か氣にさはることがあつて心の落ち着かない時には、いくらいけようと思つても、花はいふことをききません。晴れ晴れとして心の楽しい時には、花の方から、進んで動いてくれます。さうして、できあがつたものにも、その時、その人の氣持が、そつくりそのまま現れるやうに思はれます。

いつか隣りのお子さんをつれて、ニュース映畫を見に行きました。映畫の中に、日本の兵隊さんが、山の谷あひを長い列になつて、進軍して行くところが寫りました。みんな銃をかついで、重さうな背囊はなごを背負つて歩いてみました。

よく見ると肩のところ、野菊の枝をつけてある兵隊さんがあまりました。それも一人でなく、何人も何人もつけてあまりました。

あの強い日本の兵隊さんが、こんなものやさしい心を持つてあられるのかと、ふと思ひました。さうして、ほんたうに勇ましい人の心の中には、かうしたやさしい情がこもつてあるのだと考へさせられました。それでこそ、世界の人ををびつくりさせるやうな大東亞戦争を、戦ひぬくことができるに違ひありません。

それにつけても日本の女たちは、もつともつと心をやさ

しくし、心を美しくしたいものだど、つくづく思ひました。どうかまさえさんも、いけ花をみつしりけいこして、日本の少女らしい、つつましやかな心を育ててください。

今、こちらはいちばんよい時候で、空がどこまでも高く澄んであります。では、おとうさんとおかあさんに、よろしくお傳へください。さやうなら。

十八 ゆかしい心

ながうた
長唄

第一線のある夜のことであつた。

ラジオを敵の陣地へ放送する宣傳班員は、ざんがりの暗がりの中で、擴聲器の點檢をしてゐた。

そのうち偶然にも、東京放送局からの電波がはいつて來た。長唄の調べである。

「フィリピンのざんがりの中で、日本の長唄を聞くなんて、うれしいことだね。」

猫

澄みきつた大空のもとに、ナチブ山が青々とそびえてゐる。

ナチブ山の頂には敵の砲兵観測所があるが、山全體が熱帯の森林におほはれてゐるので、飛行機からの偵察でもはつきりわからない。まして平原にある友軍陣地からは、それがどの邊にあるか、ほとんど見當がつかない。

バランガへ通じる白い道は、その観測所から手に取るやうに見えるので、わが軍の貨物自動車は、一臺一臺正確な射撃にみまはれる。しかし、この道以外に部隊の進撃路はないので、どうしてもこの難關を突破しなければならぬ。

トラックや戦車は、全部木かげにかくして、敵の砲撃の目標になることを避けてゐる。みかたの砲兵は、畠の中へずらりと放列をしいて、ナチブ山の頂をにらんでゐる。

このはりつめた第一線の陣中で、ふと猫の鳴き聲を耳にした。こんなところに猫があるはずはないと思つて、あたりを見まはすと、かたはらの貨物自動車の上に、三毛猫がうずくまつてゐる。兵隊さんがどこからかつれて来て、かはいがつてゐる猫であつた。

俳句

第一線に近い宿營に、待機してゐた時のことであつた。すぐ隣りの宿營にゐた一人の兵隊さんが、俳句を作つたから見てくれといつて、夜中にやつて来た。

夜、燈火を用ひることは堅く禁じられてゐるので、窓から流れ込む空の明かるさで、兵隊さんの顔もやつとわかるほどであつた。兵隊さんがさし出す紙切れを手に取つて、一字一字薄あかりにすかしながら讀んだ。

弾の下草もえ出づる土囊どなうかな

密林をきり開いては進む雲の峯

といふ二句であつた。

四十近いこの兵隊さんは、前線への出發を明日に控へながら、その前夜、自作の俳句を讀んでくれと、わざわざやつて來たのである。「陣中新聞に發表してはどうですか」とすすめると、

「いや、そんな氣持はありません。」

と答へた。

「あなたの名前は。」

とたづねても、だまつたまま笑つてゐた。

兵隊さんは、俳句を讀んでもらつた満足を感謝のことに表して、部屋から出て行つた。

十九 朝顔に

千代ちよ

朝顔につるべ取られてもらひ水
木から物のこぼるる音や秋の風
何着ても美しうなる月見かな
ころぶ人を笑うてころぶ雪見かな

一づ 茶さ

雀の子そこのけそこのけお馬が通る
やせ蛙まけるな一茶これにあり
やれ打つなはへが手をする足をする

二十 古事記

元明天皇の勅命によつて、おほのやま太安萬侶は、ひえだのあ稗田阿禮がそらん
じるわが國の古傳を、文字に書き表すことになつた。

阿禮は、記憶力の非凡な人であつた。かれが天武天皇の
仰せによつて、わが國の正しい古記録を讀み、古いひ傳へ
をそらんじ始めたのは、三十餘年前のことである。當時二
十八歳の若盛りであつた阿禮が、今ではもう六十近い老人
になつた。この人がなくなつたら、わが國の正しい古傳、つ
まり神代以來の尊い歴史も文學も、その死とともに傳はら
ないでしまふかも知れないのであつた。

勅命のくだつたことを承つた阿禮は、それこそ天にもの

ぼるここちであつたらう。さうして、長い長い物語を讀みあげるのに、ほとんど心魂をささげ盡くしたことであらう。ところで、これを文字に書き表す安萬侶の苦心は、それにも増して大きいものであつた。

そのころは、まだかたかなもひらがなもなかつた。文字といへば漢字ばかりで、文章といへば漢文が普通であつた。しかるに、阿禮の語るところは、すべてわが國の古いことばである。わが國の古語を、漢字ばかりでそのままに書き表すことが、安萬侶に取つての大きな苦心であつた。

試みに、今日もし、かたかなもひらがなもないとして、漢字ばかりで、われわれの日常使ふことばを書き表さうとしたら、どうなるであらう。「グサキハアライ」といふのを漢字だけで書けば、さし當り「草木青」と書いて満足しなければならまい。しかし、これでは、漢文流に「サウモクアヲシ」と讀むこともできる。そこで、ほんたうに間違ひなく讀ませるためには、「久佐幾波阿遠以」とでも書かなければならなくなる。だが、これではまたあまりに長過ぎて、讀むのにかへつて不便である。

安萬侶は、いろいろの方法を用ひた。例へば、「アメツチ」といふのを「天地」と書き、「グラゲ」といふのを「久羅下」と書いた。

前者は「グサキ」を「草木」と書くのと同じであり、後者は「久佐幾」と書くのと同じである。「ハヤスサノヲノミコト」といふのを「速須佐之男命」としたのは、「草木」と「久佐幾」と二つの方法をいつしよにしたのである。これらは名前であるから、割合ひ簡単でもあらうが、長い文章になると、その苦心は一通りのことではなかつた。

しかし、かうした苦心はやがて報いられて、阿禮の語るところは、ことばそのまま文字に書き表された。安萬侶はこれを三卷の書物にまとめて、天皇に奉つた。古事記といつて、わが國でも最も古い書物の一つになつてゐる。和銅五年正月二十八日、今から一千二百餘年の昔のことである。

天の岩屋、八岐ヤのをろち、大國主神、にぎのみこと、つりばりの行くへ等の神代の尊い物語を始め、神武天皇や日本武尊ミコトの御事蹟、その他古代のいひ傳へが、古事記に載せられて今日に傳はつてゐる。

それは、要するにわが國初以來の尊い歴史であり、文學である。殊に大切なことは、かうしてわが國の古傳が、古語のままに残つたことである。古語には、わが古代國民の精神がとけ込んでゐる。われわれは今日古事記を讀んで、國初以來の歴史を知るとともに、そのことばを通して、古代日本

人の精神を、ありありと讀むことができるのである。

二十一 御民われ

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく
思へば

天地の榮えるこの大御代に生まれ合はせたのを思ふと、
一臣民である自分も、しみじみと生きがひを感じるとよん
であります。その大きな力強い調子に、古代のわが國民の素
朴な喜びがみなぎつてあります。昭和の聖代に生をうけた
私たちは、この歌を口ずさんで、更に新しい喜びを感じるの
であります。

ひさかたの光のどけき春の日にしつこころなく花の散
るらん

のどかな春の日の光の中に、あわただしく散つて行く櫻
の花をよんだ歌で、優美の極みであります。平安時代の太
宮人たちは、かうした心持を心ゆくまで味はつて、都の春を
楽しんだのでした。

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよ
る見ゆ

みなちのさわとも
源實朝は、鎌倉時代のすぐれた歌人でありました。箱根

山から伊豆山へ越えて行くと、向かふの沖の初島はつしまに、白い波が打ち寄せてあるのが見えるといふ、繪のやうな歌です。

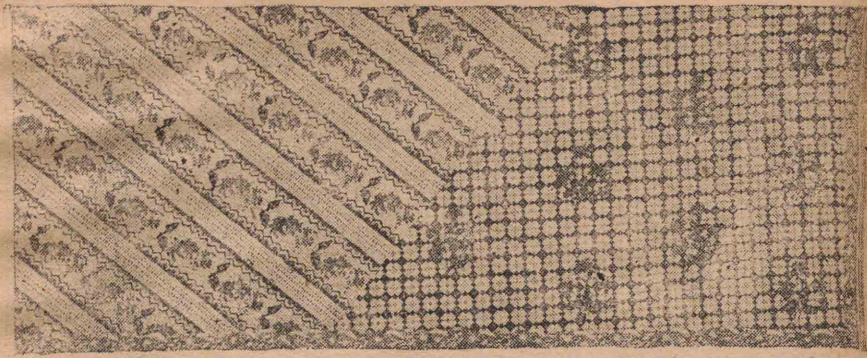
敷島のやまごころを人とはば朝日ににほふやまざくら花

さしのぼる朝日の光に輝いて、らんまんと咲きにほふ山櫻の花は、いかにもわがやまと魂をよく表してあます。本居宣長そののりながは、江戸時代の有名な學者で、古事記傳を大成して、わが國民精神の發揚につとめました。まことにこの人にふさはしい歌であります。

ひとつもて君を祝はんひとつもて親を祝はんふたもと

ある松

明治時代の學者であり、歌人であつた落合直文おちあひなほぶみが、元旦に門松をよんだ歌です。二本の門松のうち、その一本を以て聖壽の萬歳を祝し奉り、その一本を以て親の長壽を祈らうといふ意味で、新年に持つわれわれ日本人の心持が、すらすらと品よくよみ出されてあます。私たちはこの歌を聲高く讀んで、その何ともいへないほがらかな、つつましい心を味はひたいものです。



附録

一 ジャワ風景

自動車に乗つて、タンジョンプリヨクの港から、ジャカルタの町へ向かつて行く。道は運河にそつてゐる。運河には、いろいろな模様をかいた小さな船が、三角の帆をあげて静かに浮かんでゐる。

野原には、山羊の群があちらこちらにゐる。

壽 (135)	擴 (121)	獲 (101)	鳩 (80)	綱 (66)	雀 (39)	化 (23)	碎 (4)
偶 (121)	載 (101)	樹 (81)	限 (69)	佛 (41)	述 (26)	塊 (6)	豫 (8)
偵 (122)	童 (103)	登 (82)	濃 (70)	櫛 (41)	謙 (26)	粒 (9)	裝 (10)
憶 (127)	龍 (104)	泉 (82)	晶 (70)	誌 (48)	遜 (26)	宿 (11)	粗 (11)
凡 (127)	賃 (107)	霧 (88)	絹 (71)	此 (53)	混 (30)	彼 (14)	我 (14)
録 (127)	譜 (109)	辨 (88)	兆 (72)	算 (54)	適 (31)	慈 (16)	袖 (18)
蹟 (131)	盲 (109)	莊 (93)	羊 (73)	損 (54)	至 (31)	控 (19)	
朴 (132)	奇 (112)	奮 (94)	曇 (73)	如 (56)	誠 (31)		
優 (133)	怪 (112)	祕 (95)	層 (75)	紺 (58)	夢 (33)		
輝 (134)	獲 (115)	旬 (97)	俳 (76)	熊 (58)	才 (36)		
揚 (134)	封 (115)	據 (98)	性 (77)	略 (61)	偉 (36)		
旦 (135)	摘 (117)	沿 (99)	綠 (80)	遙 (63)	扇 (39)		

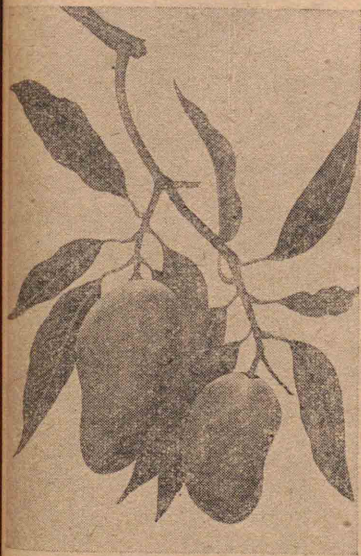
眞青な空には、白い雲が光を帯びて流れてゐる。
 自動車の運轉手は、若いジャワ人で、びろうどのづきんをかぶり、
 風のやうな速さでタマリンドの並木路を走り続ける。
 その緑の木かげにも、山羊の群がたくさんゐる。白い山羊も
 れば、黒いのもゐる。まだらの山羊もゐる。これを追つてゐるの
 は、みんなジャワの少年たちであつた。

二

ジャワは、果物の島。

果物の女王と呼ばれるマンゴスチンがある。

形は、まくはうりのやうで、味は、熟した柿そつくりのマンゴーがある。



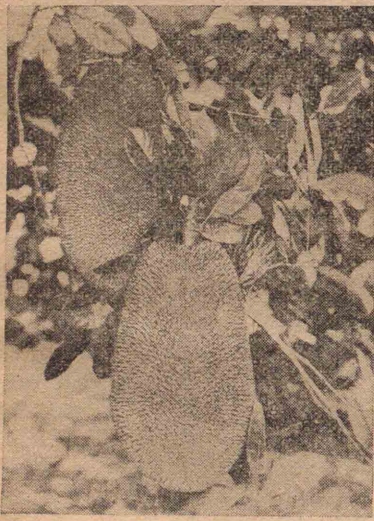
じやがいものやうなかつかうで砂糖の

やうにあまいサオ、
 一面にとげの生え
 た鬼の頭のやうな
 ドリヤン。



世界でいちばん大きな果物といはれる
 ノンコの實もある。

そのほか、パイ
 ナップルや、ザボ
 ンや、パイヤな
 どもあつて、それ
 が、みんな目のさ



めるほどみごとなものばかりである。
バナナに至つては、その種類の多いことだけでもびつくりさせられる。

三

ジャワ人たちは、男でも女でも、サロンを腰に巻いてゐる。いはゆるジャワ更紗さらで、赤や青や緑などで、花鳥はなとりを染め出したはなやかなもの、が、いつぱんに用ひられてゐる。

四

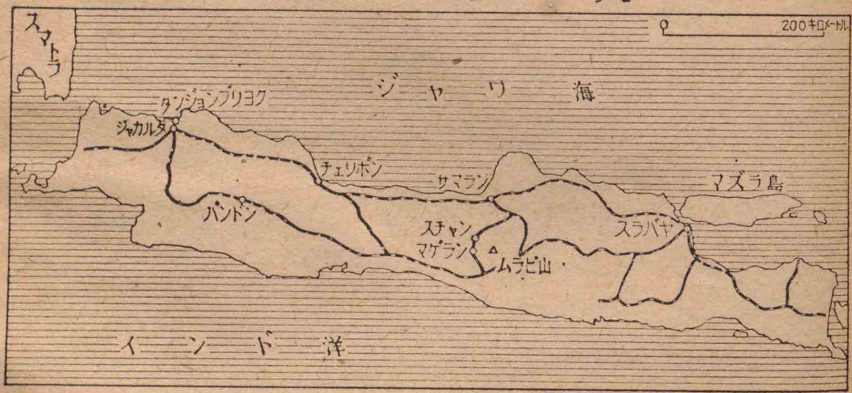
中央ジャワの高原にあるマゲランといふ町へ行く。さわやかな山道を、汽車は鐘を鳴らしながら登る。小さな山の驛に着くたびに、かごを頭に載せた女たちが、窓のところへ物賣りにやつて来る。ばせうの葉に包んだ御飯や、バナナのあげものや、山羊やぎの焼肉

などがある。葉に包んだ御飯は、日本のかしは餅を思はせる。

高原にも牛や羊ひつじや水牛がゐる。

スチャンといふ驛で乗りかへた時、ジャワ人の品のよい一家族が乗つて来た。その静かなたちふるまひを見て、このあたりがいちばんジャワらしい風習の残つてゐるところだといふことを思ふ。

百年ばかり前、ジャワが、オランダと戦つたことがある。その時、ジャワの英雄ジポ・ヌガラが現れて、五年間も守り続けた。その英雄を生んだのが、この地方である。



まもなく、汽車はマゲランの町にはいり、市内電車のやうに町の中をどんでん走る。止つたところは商店街の真中である。その夜は、高原の町マゲランにとまる。虫の聲を聞きながら、遠くムラピ山から立ちのぼる赤い火を眺めた。

二 ビスマルク諸島

ニューアイルランド島

汽船に乗つて、わが南洋のトラック島を出發し、真南へくだつて行くと、一日半ぐらゐるで赤道に達する。それからまた一日半ぐらゐる南へ航海を続けると、一つの島が見えて来る。ニューアイルランド島である。

汽船をこの島へ寄せるとしたならば、だれでもその北端にある

カビエングといふ港をえらぶであらう。



黄色に熟したレモンが鈴なりになつてゐる島の向かふには、青

い。パイヤが、手を延せばとどきさうなところに、千なりべうたんのやうにぶらさがつてゐる。パイナップルも、道のすぐそばで、ここにこした顔を見せてゐるし、南洋りんごと呼ばれる小さなトマトぐらゐの大ききの實の生つてゐる木が、早くたべてくださいといはんばかりに、往來まで枝をさしのべてゐる。もぎ取つて口へ入れると、かすかすと齒ごたへがして、乾ききつたのどへ、あますつばい汁が流れ込む。

附近には、わづかな住民の家がところどころに点在し、内地のゐるなかの村を歩いてゐるやうな静かさである。住民はパプア族で、色は黒檀くわんたんのやうに黒くてつやつやしてをり、髪はちぢれて、四五センチ以上には



のびない。腰にラップラップといふ短い腰巻を着けてゐるばかりで、いつもはだか、はだしで暮してゐる。せいは日本人よりもすつと高く、力も強い。しかし氣立てはやさしく、日本人を心から尊敬して、なかなか勤勉に働く。

昭和十七年一月二十三日、わが海軍特別陸戦隊が、この土地に敵前上陸して、濠洲兵かうしゅうへいを追ひ拂ひ、日本領の標柱を打ち立てた當時から、住民たちは、日本軍の強さと心のやさしさを知つて、すつかりなついてしまつた。

ニューブリテン島

ニューアイランド島をあとにして、更に南へ航海を続けると、半日もたつたのち、南へすつと連なる大きな島が見えて来る。ニューブリテン島である。

島の北の端に、深い水をたたへた廣い灣があつて、その灣の奥に、ラバウルといふりつばな町がある。



朝夕、町の姿をうつすこの廣い灣は、ラバウルの生命で、一萬トン級の船が百五十隻ぐらゐるはらくにはいれる。パプア島にも、ソロモン諸島にも、濠洲の東北部にも、これと肩を並べるやうな港はない。赤道をさしはさんで、わが南洋のトラックを北の最良の港とすれば、南の最良の港はこのラバウルである。

港がよければ、しぜん政治、交通、産業の中心となるので、以前はここにニューギニヤ州の總督が住んでゐた。しかし今では、日本軍がここにどつかり腰をすゑて、濠洲のかなたまでじつとにらみつけてゐるのだ。

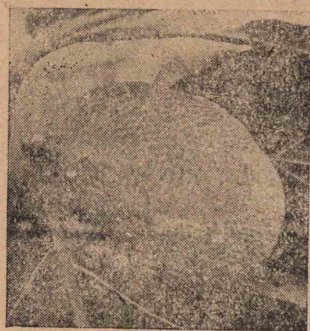
この島の中央を、屋根のやうな山脈が走つてゐる。ラバウルの町も、その後、この山脈を控へ、神戸や横須賀などと同じく、ひな壇のやうに家々が山の中腹に並んでゐる。

ラバウルは、南洋の町としてはりつばであるが、戸数は五六百を數へるに過ぎない。西洋人の残して行つた家は床が高く、その下を立つたまま、でらくに通行することができぬ。窓も廣く、金網を張つて壁の代りにしてゐるが、これらはみんな風通しをよくするためである。

家の軒下には、直徑一メートル半もある、トタンで作つた圓筒形の天水桶が並べてある。このあたりの島々は珊瑚礁からできてゐるせゐるか、井戸をほつても水は出て來ない。屋根に落ちる雨水

は、樋で残らずこの桶にたくはへておくやうにする。

船がラバウルの灣の入口にさしかかつた時、目の前に立ちふさがつてゐる火山が、白い煙を吐いてゐるたが、時々この火山が爆發して、火山灰をラバウルの町へふりまく。殊に、季節風が南西にかはる三月ごろから始つて、十一月ごろまではよく灰が降り、植物は枯れ、名物のほたるまでが死んでしまふ。皇軍がこの島を治めるやうになつてから、火山灰の降らないところに、新ラバウルの市街を作ることになつてゐる。



この島の住民の数は九萬人餘りで、みんな。パプア族である。パンの實、バナナ、タロ



いもなどを常食としてゐる。魚を取ることも上手である。

子どもが、椰子の梢にのぼつて實を取つてゐることがある。椰子の實からコブラを取るためである。その木かげで豚が遊び、あちらこちらに鶏の鳴き聲が聞かれるのも、のどかな風景である。

三 セレベスのゐなか

一

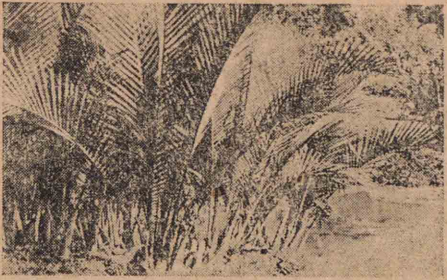
セレベスの島影は、どこか日本の山を思はせるやうな姿で、地平線の上に浮かびあがつて來た。

赤道を越えて南半球へはいると、だれしも遠く來たものだと思はないではゐられないが、今日の前に現れて來た陸地の姿や、木々の色が、フィリピンの島々よりもかへつて日本に近いものを感じ

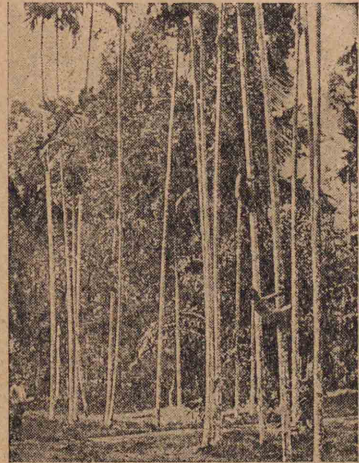
「この道はいつか来た道。」

と歌ひたくなるのが、セレベスのゐなか道であつた。耕されてゐないこんな廣い原

野といふものになじみのないわれわれには、森や林の間にひろびろとひろがつてゐる草原が、ふと麥島のやうに感じられる。ただところどころに、ニッパ椰子や、サゴ椰子や、びんらうが生えてゐるけれども、ここがセレベスだとは思へないほど日本内地の風景によく似てゐる。



三



セレベスには、猛獸毒蛇がゐないといふ。だが、家の中の机の上に、大きなとかげがちよこんと頭をもたげてすわつてゐたり、大男の手のひらほどもある、黒と黄色のだんだらの蜘蛛とも蚊とんぼともつかないものが、ふはふは飛んで來たり、毒々しいまでに朱色のとんぼが、壁に止つたりしてゐるのを見ると、あの内地の山によく似た山脈の森の中には、どんな動物がゐるのか想像がつかない。朝、日の出前から、うつそうと茂つた林の中では、うぐひすそつくりな鳥の聲や、今まで聞いたこともない笛を吹くやうな調子で鳴く奇妙な鳥の聲がする。

朝の涼しさは、その鳥の聲とともに内地の春を思はせるのであるが、やがてぎらぎらと太陽が中天にのぼると、焼けつくやうな暑熱が地上を支配する。この炎天のもとのほらかな草原に、大きな

すすきの穂が波のやうに揺れ、とんぼが飛びかふのを見てみると、これが夏なのか秋なのかと考へてみたくなる。

四

夜が来て、山脈の上の黒水晶のやうにつやつやした大空に、南十字星がかかつて、あたり一面が虫の聲に満たされ、木々の間に無数のほたるが群がって青白い光を見せ始めると、世界は太古のやうな静けさの中へはいつて行く。

住民のまばらな、廣大なセレベスの夜の静けさは、内地の都會や町に住む人々には、想像もつかないであらう。

今は二月、内地ではまだ寒い風が吹いてるであらうに、四季のないセレベスのるなかでは、窓を開けはなし、かやをつつて、きらきらと輝く南半球の星を眺めながら寝につくのである。

四 サラワクの印象

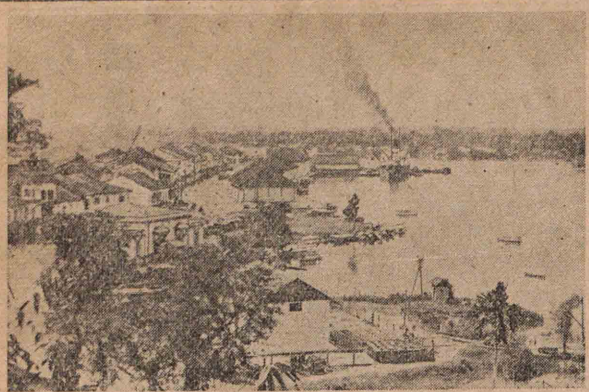
一

赤道下のボルネオにも、こんなに氣持のよい町があつたのかと

驚かされるのがクチンである。

クチンは、ボルネオ島の北西岸、海に面して細長くのびた舊サラワク王國の首都である。

サラワク川の川口から、廣々と流れる濁流をさかのぼること約三四時間、右岸一帯に打ち續くうつそうとした密林が切れて、白い壁に赤い屋根の建物がずらりと川岸に立ち並んで見える。これがクチンである。



四 サラワクの印象

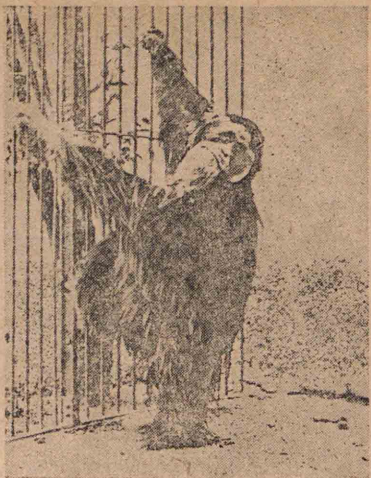
川にそつて作られた數本の鋪装道路の兩側には、雜貨店と吳服店を中心に、南洋のどこの町にも見られるあの支那風の商店が、ぎつしりと軒を並べてゐる。さうして、この町も他の町々と同じやうに、商店の持主はほとんど華僑である。

その店先は、赤や黄色のあざやかな花模様を散らした更紗地と、すきとほるやうな水色や、赤や、緑の薄いきれ地などがいつぱいにかざられ、それが強烈な南洋の光線に照り映えて、まぶしい色どりをただよはしてゐる。

町を歩いてまづ感じることは、このやうな商店街が思つたよりも清潔であり、きちんと整つてゐることである。上海や廣東あたりの支那街の、あのごつた返したやかましさは見られない。

商店街からのびた數本の鋪装道路は、町とせな合はせに續い

てゐる美しい傾斜面と、緑濃いゴム林におほはれた公園地帯の間を走つてゐる。さうして、赤屋根の住宅が、あちらこちらの緑の中に點在してゐる。



サラワク特産のオランウータンの子どもが、大きな頭を振りながら時々現れて來ては、日本の兵隊さんたちを喜ばすのもこのあたりである。これはたいてい人に飼ひならされたもので人を見るとへうきんなかつかうをして、なつかしげに近寄つて來る。オランウータン

は猿の一種で、その一舉一動がをかしいほど人間に似てをり、舊サラワク王國時代には、これを國外へ出すことを禁じて保護してゐたものである。

二

住宅の周囲には、すくすくとのびたゴムの木立が緑色の涼しいかけを作つてをり、木立の間を流れる空気はひえびえと澄みきつて、パイナップルのにほひがあたりに満ちてゐる。

ここの住宅地に明け暮れを送ると、しばしば北緯一度半の熱帯にゐることを忘れてしまふ。あの不愉快な蚊がもるなければ、蠅はもゐない。焼けつくやうな眞晝の暑さは、緑色の涼しい木かけでさへぎられ、夜になると、窓から山のいぶきが水のやうに流れ込んで来る。

家のまはりのゴム林には、名も知れない鳥が来て鳴き始める。それは、明け方になるにつれて激しく、夜明け前の一時間ぐらゐに最高潮に達する。何千何百といふ數知れない小鳥たちが、いつせ

いに歌を奏する。よく晴れた朝など、この一大交響樂きやうがくにしばしば目をさまされることがある。

ボルネオの雨季は、十月に始つて三月ごろに終る。このころになると、北東の季節風が吹き始め、一日に何回となく激しいスコールがおとづれる。中でもクチンのスコールは、よそでは見られないほど猛烈なものである。大粒の雨が、ものすごい音をたててゴムの葉をたたき、しぶきをあげ、一間先も見えなくなるくらゐ降り続く時は、息苦しくさへなつて来る。

それに雷が多い。今にも頭上に落ちかかると思はれるやうな、激しい雷が鳴り響く。スコールの荒れる夜など、すぐ目の前のゴムの木の根へ、耳をつんざくやうな雷鳴とともに、幅廣い稲妻が鋭く切り込む時など、實にすさまじい光景である。

三

ボルネオの住民であるダイヤ族は、クチンでも大部分を占めて
る。

ダイヤ族には、陸ダイヤと海ダイヤとの二種族がある。海ダイヤ族は、男女ともに胸から両手、顔にかけて、たくさんの入れ墨をしてる。主として海べに住み、すなどりを業としてるが、性質が荒つぽく、海賊を働いたり、今でも人の首を取つたりする悪習が残つてゐる。陸ダイヤ族は、これに反し性質が従順なので、海ダイヤ族に追はれて陸地深く逃げ込み、農耕をしてゐる。クチンあたりに住んでゐるのは、入れ墨も少く、小がらで柔和な顔をしてゐる。かれらは、二三百戸ほどづつ集つて生



活してゐる。毒虫と濕氣から逃れるために、部落全體は、高さ一丈ぐらゐの竹で作つた床の上にてきてゐる。

廣い竹張りの廊下が部落の真中を走り、その兩側に、竹と椰子の木で作つた長屋がずらりと並んでゐる。どの家も同じ作りで、家の中に小さな通路があり、廊下へ出なくてもその通路をくぐれば、部落全體の家をたづねることができる仕組みになつてゐる。床下には、豚や、鶏が飼つてある。廊下は、いはば部落の大通である。

女たちは、勤勉に働いて家を守つてゐる。廊下にもみを干し、小さな木臼を圍んで米をつく。そのきねは、月の世界の兎がつく餅つきのきねとそつくりである。女たちは、すわつて針仕事もすれば、陸稻の草取りから刈入れまでする。かれらは水浴がすきである。朝夕、部落のほとりを流れる清流にはいつて、部落の人たちが

そろつて水浴する眺めは壯觀である。

その他、マライ人がたくさん住んでゐる。マライ人はいちばん進んでゐて、勢力もある。男女ともサロンをまとひ、女は日本風のじゆばんを着てゐる。髪も束髪（たばかみ）のやうに結つてゐる。

マライ人の女たちが、夕方など、こんな姿で子どもをだいて門口に立つてゐるのを見ると、ふと九州のゐなかへ行つたやうな氣持になることがある。それほど日本人に似た姿である。そればかりではない。何十年も昔から、ほんたうの日本人も住んでゐる。この地に住みついた日本人の男女を見ると、マライ人とほとんど區別（くわべつ）がつかないほどである。マライ人も水浴がすきである。かれらは、これをマンデーと呼んでゐる。夕方小川などは、サロンのままマンデーをするマライ人でいっぱいである。

支那人は、どこへ行つてもさうであるやうに、ここへも支那の生活をそのまま持ち込んでゐる。團結力の強いかれらは、またたくまに支那街を作り、そこに支那でやつて來たのとそつくりそのまゝの生活と習慣（しよかん）とをくりひろげる。土地の習慣や生活には目もくれない。かれらは、自分たちだけの世界を築きあげる。それは、見てゐると自信に満ちた生活ぶりである。

昭和十七年十二月十九日 印刷
昭和十七年十二月廿一日 翻刻印刷
昭和十七年十二月廿八日 翻刻發行

本卷挿入ノ寫眞地圖ハ昭和十七年十二月 陸軍省 海軍省 卜協議濟

著作權所有 發行者兼 文 部 省

初等科國語七

定價金貳拾七錢 〆

昭和十七年十二月廿二日
文部省檢査濟



翻刻發行 東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
兼印刷者 東京書籍株式會社

代表者 井 上 源 之 丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

發行所 東京書籍株式會社

100

嬰
馬
文

初
六
男

中
西
敏
夫

